古田武彦講演会　一九九八年　九月二十六日（日）午後二時より四時　於：大阪　豊中解放会館

古代史再発見　王朝多元 ― 歴史像

はじめに　前回の要約

遅れてきて申しわけありません。それで明日京都府岩崎町の遺跡の現地説明会に参加することになっておりまして、夜　七時まで皆さんとご一緒出来ればと思っております。もちろんこれはわたくしの都合ですので、皆様がたのご予定があることは当然でございます。そういう形でやらさせていただきたいと考えており、よろしくお願いいたします。さてそれでは前回の簡単な要約から話に入らせて頂きます。（世間では）「邪馬台国」、「邪馬台国」と言って、かつその場所は分からないよというムードで扱ってきた、しかし本当にそうだろうか。私の理解では『三国志魏志倭人伝』に書いてある本来の名前「邪馬壹（一）国」を、「邪馬台国」と呼ぶのは終着点を奈良県にしたいためで松下見林の意図である。もし九州に持ってきたら筑後山門にして、後追いの理屈は後で考えると言う立場を取っていた。これは方法論としてはダメである。

これに対してわたしは、帯方郡から出て部分々の方角と里数が書いてあるのだから、その通り理解して到達するところに到達すればよい。しかもその場合、部分々の方角と里程があり、かつ全体の方角と里程が書いてあるのだから、部分を加えれば全体になる。これが不可欠の前提条件である。ところが従来の立場は、その立場に立っていなかった。それを前提条件にせず、「九州」だ、「大和」だ、と議論していた。なぜそうならないかと考えてみれば、対海国と一大国の半周の足し忘れである。その半周三百里づつと半周四百里づつを全部足し合わせるとちょうどピタリ足らない千四百里が出てきた。それで一万二千里になる。そうしますと部分里程が書いてある、最後のところ不弥（ふみ）国・博多湾岸、これが女王国の入り口である。そういう結論に到着したことを申し上げた。わたしの論理がどこが間違っているか、知らぬ顔をしたままで二十九年突っ走ってきた。後世の人が見たら信じ難いだろうが、分らん分らんという顔をしてきた。生意気な言い方だが、わたしにはそう見えるともうしあげた。

また前回の後半には、中国から貰った銅の鏡はどんな鏡か。『魏志倭人伝』だけでは、どんな鏡か分からない。「銅鏡百枚」と書いてあるだけだ。しかし中国（西）晋の時代の洛陽の墓が発掘された。その報告書を見ると、そこに出ている鏡は、全て前漢鏡・後漢鏡ばかりである。しかも死んだ人の年代が、三カ所分かるものがあるのですが、いずれも三世紀後半・四世紀始め、つまりいずれも『三国志』の作者陳寿が亡くなったのと同時期の人々である。亡くなったのは数年の前後しかない。そうすると陳寿達にとっての鏡は前漢鏡・後漢鏡である。そう理解せざるを得ない。日本列島でそれが集中しているのは糸島・博多湾岸である。

それに対して三角縁神獣鏡というのは日本における鏡を使った祭祀のあり方、お祭りのあり方、それに適合するような適切な形に縁が付けられている。また多数の鏡を収納するために、重ね仕舞いができるように、便利なように不都合がないように三角縁にされた。

同時にわたしの推量ですが、前漢鏡・後漢鏡はそのものだったら、それを貰ってきた人にしか真似る権利がないと考えたのではないか。だから明らかに中国にない違った鏡であるなら、これは当時の常識ですから、現代風に言えば特許を冒していませんよ。そういう慎みをあらわしたものが三角縁神獣鏡という中国にはないユニークな鏡の性格ではないか。こういう議論は今までにお聞きになったことはないと思いますが、むしろ前漢鏡・後漢鏡とまったく同じでないところに意義があったのではないか。

以上のことが、わたしが申し上げた前回の要点でございます。

一『後漢書』の倭

さてプリントを見ていただきますと、『後漢書』が出てまいります。前回『三国志』は、全て「邪馬壹国」であるともうしました。「邪馬台国」と書いた版本は早い時期も遅い時期に書いたものない。全て邪馬壱国であるともうしました。一番簡単な横棒の「一」まであると申し上げた。

ところが「邪馬台国」という言葉は松下見林が発明したのか。空想したのか。そうではない。『三国志』より百五十年後に出来た『後漢書』は、南朝劉宋という時代に作られた。――後の南宋と違って区別するために、劉という人が天子になったのでそう呼びますが――その『後漢書』に、はっきり「邪馬臺国」と書いてある。しかも『後漢書』に関する限りは、どの版本をとっても「邪馬臺國」しかない。「邪馬壹国」と書いてある版本は全くない。ゼロである。ということは何を意味するかというと、前回申し上げたことでもお分かりのように、後漢書を論ずる場合は、これを邪馬一国と勝手に書き換えてはならないことを意味する。そうですね。『三国志』は「邪馬壹国」と書いてあるのだから「邪馬台国」と勝手に書きかえるのはおかしいのではないかともうしあげた。同じ論理で、『後漢書』は「邪馬臺国」としか書いていないのだから、これをもし古田なら、わたし古田が勝手に邪馬一国の間違いと見ましょうと「邪馬壹国」と書き直すのはおかしい。ぜんぜん話が通らない。

じゃあ！一体どうなっているのかと言いますと、解決は大変簡単なところにある。

なぜならば文章というのは単語を含んでいます。単語は文章に包まれています。つまり「邪馬臺国」・「邪馬壹国」とそれぞれ出てくるけれでも、その前後の文章はぜんぜん違う。じゃあ！どう違うか。

『三国志』

・・邪馬壹國女王之所都・・・可七萬餘戸自女王國・・・

・・邪馬一国は女王の都するところ・・・戸は七万余戸なるべし

『三国志』は、女王の都する所を言っている。戸数七万戸という、たいへんな広がりでしょう。そのたいへんな広がりの国を邪馬壹国と呼んでいる。都全体である。

『後漢書』

・・其大倭王居邪馬臺國、・・・

・・その大倭王、邪馬台国に居す・・・

ところが『後漢書』では、そうではない。つまり倭国の中心、代々の大倭王の住んでいるところは「邪馬台国」というところだと言っている。大倭王一人がいるところが主語となっているです。そこの場所を、「邪馬臺國」だと言っている。

『三国志』でも、三十カ国もあるように分かりますように、なんでも「国」と言っている。邪馬壹国も「国」と言っているし、小さな国も「国」と言っている。小さな浦のようなところも入っていますが、それも「国」。国と言っても、いろいろな段階の国を「国」と言っている。いろいろな人間の集まった政治単位を「国」と言っている。これも他にもいろいろ検討するとおもしろいこともあるが、今言ったことは明らかである。この場合『後漢書』で言っているのは大倭王がいる場所のことであり、『三国志』では七万戸のことである。『後漢書』で言っているのは大倭王一人のいるところのことである。その場所を、地名を「邪馬臺國」と言っている。もちろん、そこには「とりまき」ぐらいは居る。概念としては居ても居なくても良いが。そこが邪馬台国である。

これも言ってみれば当たり前のことですが、それまでそのことに、私も含めて気が付いていなかった。それを従来は、あたかも取り替え人形の首のように、邪馬一国が好きな人は「邪馬壹国」、邪馬台国が好きな人は「邪馬臺国」と、取り替えできるように思っていた。とんでもない間違いだった。

そういうことでいったい「邪馬臺国」とは何か。「台（だい）」を検討することに、『「邪馬台国」はなかった』を書いていらい、今まで関心があったが、これも探求するのに時間が、かかった。忙しくて現地を訪ねる時間がなかった。

なぜかというと字地名を調べていて、不思議な現象に目がいった。『明治前期全国小字調査書』（内務省地理局編纂基本叢書、ユマニ書房刊。明治政府が明治初年に調査。第二次世界大戦の空襲で、ほとんど消失。棚の端の両方の焼け残りが、なんと北部九州と青森。明治政府が、これをおこなった目的はおそらく、税金の徴収と徴兵の基礎資料が目的であると考える。）というものがあり、それを調べると、九州に「ダイ」がやたらに出てくる。一つの村に一つ以上在る。

もちろん現在の「台（だい）」とは意味が違いますよ。「・・台」、不動産屋さんへ行けば必ず書いてある。あれはちょっと見晴らしが良いですよと言う意味の「・・台」と、住宅地に宣伝の意味の「台」を付けたものです。

ところが字地名はそんなものではない。だいたい小字地名は日本語である。漢音はゼロではないが珍しい。「天神」とか「釈迦」など漢音の中国語ですが、ないことはない。しかし七・八割方は日本語です。福岡県では「ダイノウチ」、「ダイノウエ」など、やたらに「ダイ」が多く、大分県豊前なども、村々の字地名は軒並み「ダイ」「タイ」だらけである。私がふしぎに思ったのは、軒並み漢語が、小字地名にあるとは考えられない。もしかしたら「ダイ」は、日本語かも知れない。なぜ日本語かと言いますと、「平ら」、「平らげる。」という言葉がある。ご馳走を平らげる。敵を平らげる。そういう使い方をする日本語です。「ら」は空、村などの日本語ですから、語幹は「たい」である。「平らな」、「平らげる。」、「平らにならす。」など名詞・形容詞もあり、中国語ではなくて、日本語かも知れない。これを机の上で想像しただけでは答えになりませんので、現地に行って調査してみなければならない。

東京にいたときは自慢にはならないが、講演とか授業などがあり、忙しくてとても現地をたずねて調査ができなかった。それで定年になり京都へ帰ってきて、毎日日曜日という結構な身分になり、やりたいことは一杯あるが、まず一番目に取り組んだのがこの件である。それで志賀島の国民休暇村に拠点を設けて、一九八六年の二月、毎日調査に歩き回った。現地を訪れた。こういうことはやってみて、無駄に終わることが多いですし、また思ったよりも時間がうんと掛

かることも多いが、この場合は逆で「案ずるより生むが易し」、皆簡単に分かった。例を上げたい。

1　福岡県遠賀郡大鳥居村　和田　丸ノ内　臺(現在は北九州市)
2　遠賀郡蜑住(あますみ)村　小森　森下　臺ノ内（現在は北九州市）
3　鞍手郡金丸村　走折　臺ノ上　深ノ口(ふけのくち)（現在は若宮町）

1　福岡県遠賀郡大鳥居村　和田　丸ノ内　臺

持ち主のお百姓さんに案内して頂き「ここが私の臺です。」と確認し、道路と川の間のぬかるみの低湿地を「臺」と言った。そこは堤より低い。

（それでも無理に考えれば、高台を削ったことがあるかもしれない。そんな兆候はないが。）

2　福岡県遠賀郡蜑住(あますみ)村　小森　森下　臺ノ内（だいのうち）

ここは明確な場所です。湾が入り込んで昔海だったことがはっきりした。輪郭が残っている。「私の所の畑が臺ノ内です。」と同年のお婆さんから確認した。昔海であったところを埋め立てたことが明瞭です。もっと広い低湿地の台の一部である内(うち)です。

3　福岡県鞍手郡金丸村　走折　臺ノ上（だいのうえ）　深ノ口

石鞍手高校のプールの有る所が「臺ノ上」です。田畑より六十センチほど高い。道路よりわずかな勾配で学校の校門に向かって上がっている。その上を「臺ノ上」と言っている。従って「臺」はその下の低湿地となります。

（また関東ではもっとはっきりしていました。堤より低い低湿地が「臺」です。九州と違うのは、非常に広い領域を「だい」と呼んでいる。利根川に面した広大な低湿地が、「臺」です。）

中国語の「ダイ」は、盛り土を表し、更に発展させて「宮殿」を言うが、それではなくて、低湿地を「だい」と言っている。

考えてみれば日本では低湿地が多い。島国だからその低湿地を埋め立てて平らにして、畑や家を作っている。そういう低湿地の所を「だい」と言っている。現在不動産屋さんがいう「台」とは逆である。あれは見晴らしがよい、御殿も建ちますよという意味の中国語の「台(ダイ)」ですが。ところが『明治前期全国小字調査票』に残っている字地名の「だい」は、低湿地を埋め立てて平らにした所です。それを意味するということが、予想以上に分かってまいりました。おそらくもう少し後なら、分からなかったかも知れない。私と同年ぐらいの人がいて、話がうまく通じて案内していただいた。ちょっと若い人に聞くと知らないと言われた。そういう意味で、いい時期だったかも知れない。最後の時期であったかも知れない。とにかくそういうことで、分かってきましたのは「たい」という日本語があって、それは低湿地を意味する。

そうすると「やまだい」とは、「やま」と言われるところがあって、そこの側の低湿地を意味する所ではないかという事が分かってきた。

しかもこの場合大事なことがある。『後漢書』は、『三国志』より百五十年あとに書かれた。当然『後漢書』を書いた范曄(はんよう)という学者も『三国志』を読んでいる。また『後漢書』の読者である中国のインテリも、もちろん『三国志』を読んでいる人が読者になる。その場合『三国志』を見てみると、そこにはきちんと帯方郡からの方角と里程が書いてある。ところが『後漢書』には、方角と里程が書いてない。これは何か。方角と里程なしの国に変化したのか。そんなことはない。つまり方角と里程はきちんと『三国志』に書いて

ありますので、重ねて書くことは致しません。ただ『三国志』には、七万戸の邪馬一国という政治地名が書いてある。七万戸という大変な広がりを持った地域である。ところが『三国志』では大倭王のいるところが書いていない。中心の場所が書いていない。玄関の不弥国に入った。都はその南にある。都の領域に入ったことで満足している。それを一歩突き進んで新しい情報を提供します。それは「邪馬臺」と呼ばれている所です。だから『三国志』の倭人伝と場所は同じ場所である。ただその場所を指す場合、広域を指すか狭い領域を指すか。その違いだけにすぎない。ということが分かってきた。

（「邪馬壹國」の「壹」は、中国に二心なく忠誠をつくすという意味を『三国志』では表わしている。中国に対するオベンチャラを入れた政治地名である。もともとは倭国の「倭」は「wi」という発音ですから、それを下敷きにして音が似ていて「二心なく忠誠をつくす。」という中国に対するオベンチャラ用語だと、わたしは観ている。壹与が考えた。壹与もほんらいは倭与だと考えていまが、それを「壹与」で表したと考えている。）

これも私にとって大きな発見でした。特にこの場合、方法的に申しますと「承前史書」といわれるルールである。中国の本には、歴史書を書く場合一つの重要な方法がある。定型がある。

何かというと、中国の王朝にはA、B、C、D、Eと次々時代によって王朝の歴史書が作られている。その王朝の真ん中で作られたものもあるし、直後に作られたものもある。大体その王朝が終わってから、その直後の王朝に作られるようですが、『史記』『漢書』はその王朝の最中に作られる。『三国志』は(曹)魏がおわって後の(西)晋の王朝で作られた。ですから王朝が終わって次の王朝に作られるというルールは、『三国志』から始まったと言っても良いようですが。いずれにしても皇帝が承認した正史。個人が勝手に書いたものではなくて、これは間違いないですよと、「王朝としてそれを承知します。」と、決定済みであるものが「正史」と呼ばれる。

正史ですから、正史Bは以前に書かれた正史Aを無視して書くことは許されない。当然正史Aを土台にして、前提にして、それにないプラスを書き加えるのがルールである。以前の正史を、そんなものは私は知らんよ。私が書いたものではないのだから、勝手に書くよというものではない。そういう書き方はしない。当然といえば当然である。そういうルールが成立している。言葉でいえば「承前叙述・継史書」である。わたしはそういう名前で呼んでおきます。

そういう方法が、行われているという事は前から思ってはいたが、邪馬台国と邪馬壱国という問題の検証を通じて、はっきりと確認した。だから「台（臺）」と「一（壹）」を松下見林のように勝手に取り替えて平然としている。これは「承前史書」の性格を知らないで、意識しないで、すげ替え人形のように自在に取り替えるように、「どっちが本当だろう。私はこれが良い。」と判断する。学者も含めて、不思議なことにそういうやり方を、今まで行ってきた。ですから中国の歴史書の書き方を正確に認識した上で、そこに出てくる単語を処理するという方法。これは学問として基本だと思うのですが。それを生意気ですが、その基本を忘れていたのではないか。今でも『倭人伝』に邪馬台国があると学者は平気で言っている。それは基本の処理を忘れた人々が、おこなっていると感じている。わたし以外はみんなそう処理しているから、ぜんぶ部忘れていると言うのは生意気ですが、しかし私にはどうもそうとしか思えませんが、どうでしょうか。

以上、前回の邪馬台国問題の追加であり、大きな答えになっていると思っております。

二　倭国の南界を極(きわ)むるや

さて『後漢書』には、今までにないもう一つ重要な、まったく新しい情報が読み込まれております。この表現です。

倭國之極南界也光武賜以印綬

倭国の南界を極(きわ)むるや、光武　賜うに　印綬を以ってす。

この表現です。広げて書くと書き方がちがっている、この表現です。

建武中元二年倭奴國奉貢朝賀使人自稱大夫倭國之極南界也光武賜以印綬

建武中元二年、倭の奴国、奉貢朝賀す、使人ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武　賜うに　印綬を以ってす。

従来はこのように読まれて来ています。皆さんもこれに慣れていると思います。しかしこの読み方はおかしい。

この「倭国の極南界」はどこを指すか。結論からいえばはっきりしていて、九州の志賀島、金印が出た所を指していることは間違いがない。広げて言っても博多湾岸を指していることは疑いがない。ところがここで「倭国の極南界なり。」と、ここでは言っている。

ところが「極南界」の「極」という字は、中国人にとっては簡単に使える字ではない。「極」は中国語で極端な話を示す。『後漢書』で言いますと新彊省シルクロードの西の南の果て、ここから先はヒマラヤ山脈に向けて道はそこで終わっている。そこで道は極まると言っている。長安から辿(たど)ってきた道が、そこで道が終わっている。そこで「極」という字を使ってとうぜんです。又もう一つ出てきまして『三国志』では、中国と古くから往来してきた粛慎国のことを述べて、――粛慎というのは日本の歴史を考える上で重要な国名、民族と思いますが――粛慎国は沿海州、場合によってはベーリング海峡辺りまでを指すのでしょうが、とにかく「この北は極むる所を知らず。」と書いてある。そこから先、北の方は分からんと書いてある。これは非常に正直です。現在の北極を指すのでしょうが。中国人は粛慎国と往来しているからそこまでは分かっているが、その北は分からんと正直に書いてある。そこで「極」を使ってある。中国の中心、洛陽・西安から見まして、その認識の果てる所を指して、一番端のところ、それが「極」と言われている。

そうすると中国側にとって九州博多や志賀島が認識の南の果てなのか。そんなことはない。まだ投馬国が南の方にあると書いてある。方角が東の間違いだと日本の学者が言ってみても、それを中国の人が間違っていると思って読むわけではない。当然中国の人は南だと思って読む。とうぜん博多湾岸より南の方に、五万戸の国があるということはちゃんと『三国志』に書いてある。なのに志賀島が「極南界」だとはおかしい。

大体志賀島が倭国の南の端ではおかしい。北の端と言うならば、まだ対馬・壱岐を無視すれば理解できるが。また「南の端」というならば、かりに朝鮮半島全部に倭人が住んでいて、その南の端が志賀島に及んでいるというのならば理解できるが、そんなことはない。その先に人が住んでいて、わからんと言う話ではない。ここで「倭国の極南界なり。」という読み方はおかしい。私もおかしいと思わなかったけれども、考えてみたらおかしい。

更にその次がおかしい。印綬をやった理由が書いていない。「光武賜以印綬　光武賜うに印綬を以ってす。」これは我々が知っている金印授与である。我々が知っている臣下として最高の金印を与え

た。しかし最高の金印を与えた理由が書いていない。「理由は分からないけれども印綬をやった。文句はあるか。」という書き方に感じるように読める。歴史叙述としてはまったく主旨が整っていない。

しかし、これは読み方が違っていたのではないか。ある方のご質問を契機にして、気が付いた。

原文を見て下さい。「也」は、終止の「なり」と読むとは限らない。中間の「や」とも読み方は出来る。この用法は『後漢書』にも両方あり、また東夷伝自身にも両方の用法がある。当然「也」とあれば、「なり」とよむか「や」と読むべきか、迷って欲しかった。だから「や」と読めば、どうなるか。

倭国極南界也光武賜以印綬

倭国の南界を極むるや、光武　賜うに　印綬を以ってす。

わこくの　なんかいを　きわむるや、

こうぶ　たまうに　いんじゅを　もってす。

つまりなぜ光武が印綬を遣(や)ったか。東夷の世界では他に金印をやった例はない。高句麗も新羅も百済も金印は貰っていない。それをなぜ倭国にだけ金印をやったのか、理由が書いてある。倭国は南界（南の世界）を極めたから、倭人が報告したので、それを知った光武は倭国に金印を与えることにした。

と、このように書いてあると理解する。

実は滅多に出ない「極むる」と言う表現が、『後漢書倭伝』の最後にもう一度出てくる。

使驛所傳極於此矣

使駅の伝うる所、ここに極まる。

自女王國南四千餘里至朱儒國人長三四尺自朱儒東南行船一年至裸國黒齒國使驛所傳極於此矣

これは裸国・黒齒国という問題の国である。『倭人伝』でも出てきますが、これを『後漢書』で再び取り上げまして、――使駅というのは、中国への使者である。「駅」は使者が馬に乗ってきますので、馬を留めるところ、駐在所です。――その中国への使者が、倭人から聞いて洛陽に報告したところは、裸国・黒齒国がいちばん端である。いちばん最後のところである。ここに「極まる」が出てくる。これは良いですよね。まさに『倭人伝』が言うように東南方向に船で1年行ったところ、船航一年かかる。そこに裸国・黒齒国がある。そこの話を倭人から聞いて記録しているのですが、そこが一番端である。そこから向こうは分からん。これは正直ですね。これもなかなか明晰な認識です。「そこから向こうは分からん。」ということは、そこから向こうはある。向こうに何かあることは予想している。陸ですから、そこから向こうには何かあるのでしょうが。しかしそこから向こうは分からんと言っている。倭人が我々に教えてくれたのは、そこ止まりである。非常に認識のしかたが明確です。ここに「極」が出てきます。ここに、倭伝の最後にもう一度「極」が出てくる。そうしますと志賀島が倭国の南の一番端（極南界）だとはおかしい。全くおかしい。

ここに書いてある倭国の「南界（南海）」とは、簡単に言えば太平洋のことである。倭人がその領域を極めた。太平洋領域を極めた。その一番端に裸国・黒齒国があると倭人がわれわれに報告してくれた。そこで倭国に、その倭国は博多湾岸の倭国だけではなくて、裸

国・黒齒国に至る太平洋の王者として、そういうものとして金印を与えた。こう言っている。壮大なスケールですね。それはある意味で、自画自賛かも知れません。そういう倭国が我々に使いを送ってきたので金印を与えた。言うなれば、我が中国の天子のご威光は船航一年の裸国・黒齒国迄及んだということになる。そういう意味では自己賛美かもしれません。しかしそう読んだときに初めて、文章がきちんと分かる。志賀島が南の一番端（極南界）だという、べらぼうな話ではなくなる。

しかしそうは言っても、倭国が裸国・黒齒国の情報を伝えたぐらいで金印をやろうというのは少しおかしいではないか。このように考えられるかたがあるかも知れない。もっと裸国・黒齒国が倭国と関わりがあるならともかく、同じ倭人であるというならともかく、そのような噂を伝えてきたぐらいで、情報を伝えてきたぐらいで金印を遣（や）るのはおかしいではないか。そのように思う人があるかも知れません。その通りである。

ところが凄（すご）い話が出てきた訳です。

ここにアメリカのワシントンの世界最大のスミソニアン博物館、そこのエバンズ夫妻が作成した、たいへん大きい報告書をお回し致しますので見て下さい。この報告書を作成したときは三十五年ぐらい前ですが、アメリカという国が今みたいに赤字の国でなく栄えていた実力十分の時代の報告書ですから、白黒ですけれども写真などもしっかり載っており、前半はいろいろな統計が載っている見事な報告書です。

これで何を言っているかというと、南アメリカ西海岸の北半分ペルーからエクアドルにかけて土器が出てきた。なんと日本の縄文土器とそっくりの土器である。それでエバンズ夫妻が日本にやってきて研究されました。やはりこの土器は縄文人が南米に渡ってそこで、そこで新しい文明を開いたと考えざるを得ない。そういう結論を出された。この説はアメリカでは非常に有名で、博物館では太平洋を真ん中にした大きな地図が壁に貼ってある。しかも日本から南米に来たという矢印がある。それを見学に来た子供たちが写している。そういうことが日常的におこなわれている。ところが日本ではだれも教わっていない。皆さんも小学校・中学校で教わったことはないでしょう。日本では考古学者はみんな知っていますが、アウト。考古学者が出させない。ひどい話ですね。情報遮断（しゃだん）という形で出させない。言い出すとこれも面白すぎて、たくさんありますが、わたしには思い出があります。もう時効だと思うので言いますが、朝日新聞社が「縄文人展」を企画した。このエクアドルの土器の展示を、一番の華にしたいので、「エバンズさんに紹介して欲しい。」と言ってきた。わたしは喜んで紹介状をエバンズ博士に書いた。エバンズ博士は喜んでいた。ところが日本の考古学者が反対。そういうモノを出すなら、我々は（展示品を）引き揚げると拒否した。大学の所有しているものは私有物ではない。国民の物を預かっているにすぎないのに、それを私有物のように出さない。一斉にストライキ。そういういきさつがあって、朝日新聞社は泣く泣くわたしとエバンズ博士に撤回を要請してきた。そんな経過を知らないで「縄文展」は行われた。見せられている人は、知らぬが仏。見せられた人々はそういう一幕があって、一番の目玉はカットされたということは、日本国民に知らされないままに行われた。わたしは知っている。これだけでなく、もちろん教科書からもカットさせられている。

これなども、わたしなどは常識的な解釈で、賛成・反対は、いくらあっても良い。賛成か反対かは、見せてから行えばよい。賛成か反対かは別にして、見せて展示会でも講演会でも、反対の説がある

と紹介すればよい。日本の学者には、これに対する反対の説があると書けばよい。邪馬台国でも、近畿説と九州説があると書いてある。ところがそれを書かせない。一切あることを知らせない。ひどいではないですか。現在厚生省などの情報公開といって騒がれていますが、物質的に見えた物は気がつくが、精神の傷は気がつかない。気がつかないままになっている。

このことも話を始めると切りがないので、この辺で省略するが、わたしは『「邪馬台国」はなかった』という古代史の第一番目の本を書いた。書き終わった頃は『邪馬壹国』というだけの題だったのだが、それを朝日新聞社の米田さんにお渡しした。そうすると米田氏がお出でになって言われたことだが、「大変結構な原稿です。しかし最後の「縄文人が太平洋を渡る」という話だけは、今回カットさせて頂きたいと思います。読者が付いてゆけないのと思いますので。」と、こう言われた。ところが、わたしはそう言われることは覚悟していたので、その答えも用意していた。「それはダメです。わたしは読者をおもしろがらせるために、おもしろおかしく書いたものではありません。倭人伝の中に、東南船航一年の所に裸国・黒歯国がある。それを本気で考え、そう受け取ろう。」とした。

当時二倍年歴という問題、倭国は今の半年を「一年」と言っていたという問題が出てきていた。その立場から観ると半年である。半年で行ける所はどこだろう。ちょうどその時、勇敢な青年達がヨットで太平洋を往復しておりました。まず堀江青年、今は良いお年ですが。次は鹿島俊男さん。あの方は往復された。そういうデータから観ると、日本からアメリカのサンフランシスコまではいずれも三カ月です。海流の早さですからヨットの速さではない。自分の漕ぐ早さでもない。もちろん労力の早さでもない。単純に海流の早さである。風と波の力である。それでサンフランシスコから、単純に地図に糸を引っ張ってみると南アメリカの北部になる。エクアドルとペルーになる。しかし南のチリには行かない。長いですからね。南アメリカの北半分には行けるけれども南半分には行かない。それで大胆にも南米のエクアドルとペルーの地に裸国・黒歯国があったと考えざるを得ない。『倭人伝』の表記を信用すれば、そのようになると書いた。もっとも全くの当てずっぽうというわけでもなく、手がかりがないわけでもなかった。南アメリカの北部沖合いにはフンボルト海流という最大の寒流が上がってきて、そこで黒潮という世界最大の暖流とぶつかっていた。黒潮の生命はそこで終わる。だから船で流されると、そこから先へは行けない。そこで陸に上がるか、太平洋の真ん中タチヒ島に行くしかない。一つの終点に当たる。そこが裸国・黒歯国になる感じです。そこが半年に当たるので、偶然とは思えないという感触はあった。しかしそれだけのことで、わたしの立場は海流の問題は直接関係しない。わたしの立場は、フンボルト海流よりも、ともかく『倭人伝』の表記を、そのまま著者陳寿が言いたいことを言いたいようにそのまま理解すると書いた。いろいろ先入観を交えずに、その立場から書くとそうなるという事です。

もう一度言うと、米田氏が「縄文人が海を渡った。」という件だけはカットさせていただきたいと思いますと言われた。わたしは、それに対して「それはダメです。わたしは読者をおもしろがらせるために書いたものではありません。わたしの方法論だと、そうなるということです。」とお答えした。それをカットしたら、たいていの人は気が付かないだろうが、読者の中に一人でも「あっ古田は逃げたな。」と気がついた人がいたらどうなる。「陳寿の言うとおりに従うのだ。」と序文で言っておきながら、「裸国・黒歯国については、あんまりひどい。」と思って、逃げたな。こう思われたら、とくに

手紙で言ってこられたら返事の仕様がない。「出版社に言われた。」と言っても、それは弁解にならない。言ってこなかったら、その読者に永遠に敗北したことになります。だからカットは出来ません。

この意味は、「縄文人が海を渡った。」という件を書かないなら、朝日新聞から著作を出していただかなくて結構です。生意気ですが、腹を決めてそう答えることに決めていたので、その通りお答えした。そうすると米田さんが「分かりました。会議にかけて検討してみます。」と言って、五日目に来られて、「結構です。」と返事があった。あの瞬間『「邪馬台国」はなかった』が、朝日新聞から出ることが決まった。朝日新聞から出なかったらどこから出たか分かりませんが。出なかったかも知れないが、出版が決まった一瞬です。もちろん朝日新聞社の中に入ったら、うんといろいろ反対があったと思う。それを乗り切って下さったのが、先ほどもうしあげた米田さんという人の力であること疑っておりません。

ともかく、わたしは文献解読という立場だけで、そこに到達した。それで『「邪馬台国」はなかった』が第二版をむかえたとき、米田さんから連絡があって「実は面白い報告がアメリカにあります。縄文土器が南アメリカから出ているという報告があります。」ということを、朝日ジャーナルか何かの記事を元にして知らせて下さった。それで私はエバンズ夫妻に手紙を出した。手紙を出してから驚くような早さで返事が来た。出して四・五日目に返事が来た。付いたらすぐ返事をだして下さったと思う。それでこの厚い本を送って下さった。その本は二〇日かかっているが。

それで現在では問題が二つ加わりました。

一つは十年ぐらい前のブラジルの寄生虫の研究者・自然学者の方々の、たくさんの報告です。英語やポルトガル語の報告ですが。それは南米のミイラである。とうぜんミイラにも、汚い話ですが糞(うんち)がある。糞(うんち)も一緒にミイラになっている。またその中にある寄生虫も当然ながらミイラになっている。それを調べられた。また野外にも糞(うんち)がある。それもいちいち拾い集めて調べられた。その寄生虫の研究報告です。すると驚いたことに、その中にある寄生虫は、アジアに多い寄生虫、とりたてて日本列島に多い寄生虫であることが分かった。日本列島に多い寄生虫が、なぜか南米のミイラのうんちのなかに一杯いる。それでこの自然学者たちは大変困られた。なぜこまったかというと、ベーリング海峡を渡ってきたのでは、困まる。もちろんモンゴロイドがアメリカに渡ってきたこと自身は現在学問的常識である。ベーリング海峡を渡ってきた人はいる。「一万年の旅」というテレビなどで放映されたこともある。

しかし今の場合は、ベーリング海峡を渡って来られたのではダメである。その寄生虫は熱に弱い。摂氏二十二度以下では死滅する。われわれは、その寄生虫をお腹に貯めて、ずっと持って行けばよいと思いがちだが、そうは行かない。一度外に出なければならない。教えられた人からの受け売りですが。汚い話ですが「うんち」で一度出す。出てもう一度野菜などにくっ付いて、人間の口に入る。そういう体内と体外の循環を通じて、寄生虫というのは生きている生物である。ですからアラスカを通れば外に出た瞬間、死んでしまうから循環が出来ない。事実ベーリング海峡の周りにも糞(うんち)はあるが、寄生虫はいない。北米にもほとんどいない。正確には若干いるところがある。しかし南米のミイラにはなぜか一杯いる。

そうすると、はるばるベーリング海峡を越えてきた人々のものと考えるには、あまりにも自然科学的に無理がある。それでなにか他

の方法はないかと探していた。それでエバンズ博士の研究が注目された。これだったら生き延びることが出来る。黒潮は暖流である。船や筏の中でいろいろなドラマがおこなわれているのでしょうね。うんちしたり、くっ付いたり離れたりいろいろしているのでしょうが、それで生き延びることが可能である。

ということで、エバンズ説に基づいて理解できるという報告が、一人ではなくグループで何回も報告が出されている。そういう見解が十年前に、何回も出されている。日本で紹介されたのは、数年前である。

もう一つは四・五年前、癌学会で発表された田島和雄という、名古屋のガンセンターに疫学部長として勤務されている方の研究報告である。ＨＴＬＶ型というウィルスが有りまして、これを持っていると大変不幸なことになる。四十・五十歳代の働き盛りの船頭さんなどが、原因もなく突如苦しんで発熱し、亡くなる。私が高知県の足摺岬に行ってまず聞かされたのはこの話でした。何が原因かは分かっていないですが、そういう病気、奇病がある。後で田島氏に聞くと、その病気は沖縄、鹿児島、高知、和歌山、北海道と太平洋岸に点々とウィルスを保有している方がいる。これは遺伝子ではない。親から子へ、母乳を授ける時に一緒に移っていく。牛乳に切り替えると遮断できる。そういう医療の問題である。

ところがこのウィルスの親戚を調べたがどこにもない。中国、朝鮮にもない。きっとあるだろうと思っていたインドネシア・ミクロネシアにもない。ところがなんと南米のインディオの方を調べたら、この人々からぞくぞく発見された。今は研究が進んで、一型、二型、三型、・・・と細かく分類できるが、いくら細かく分類しても日本列島と南米のインディオは同一の型である。一致している。これが何を意味するか。簡単に言うと先祖が一緒である。この方法の場合は、途中は分からない。変な呼び名ですがインディオ、現地の方々と日本列島の太平洋岸沿いの方々とは、同じ先祖からの別れである。それだけは明確である。これが現在の状況である。

こうなると、わたしは倭人伝をそのまま理解しただけであるが、「古田は馬鹿だ。あんな事を言って・・・。」と言われてきたが、わたしの説が駄目（だめ）であると言うことは難しい。

ある有名な学者が書いてましたよ。学生に、『「邪馬台国」はなかった』はどうですか。」と聞かれて、返事として「それは彼が書いている南米に裸国・黒齒国があるという話を見ればよい。あの話を見ても、彼の邪馬壹国説は論ずるに足りないことが分かる。」と答えている。変な論理ですが、そう書いていらしゃる有名な方、熊本大学の教授をしておられて亡くなられた方、藤間生太さんですが。書いた人は正直で、他の学者はみんなそう思っていたらしい。ところが実は、今お聞きのような証拠が次々出てきたので、とてもこれは無視できない状態である。無視できない状態であるけれども、まだどの学者も無視している。そんな説があるのは知らんよ、と無視する態度を繰り返している。無視する姿勢を、まだ続けている。いつまで続くのでしょうか。

さて今の問題で驚くことがある。これは何を意味するか。裸国・黒齒国にいる人々は広い意味の倭人である。そういうことを意味する。日本列島人である。そうする倭奴（いど）国というのは太平洋に跨（またが）る海洋国家である。

大体「倭の奴国」というのは無茶苦茶である。中国の金印というのは「ＡのＢ」と、与える方と与えられる方が一対一であるのがルールである。その中に中間の第三者を入れるやり方はない。それを三宅米吉という明治の考古学者が、金印を三段読みで読んた。それが

本居宣長の国学と結びついて「那の津」と一致する。それで「漢の倭の奴国」と読んだ。

それは無理で倭奴国。「凶奴」というのが後漢の光武帝の終生のライバル。それに対して従順な種族という意味の「（漢の）倭奴国」。その倭人の総体を指すのが「倭奴」である。その総体の中には、裸国・黒齒国人も入っていたのではないか。震えるような感じです。その判断は正しかった。もちろん後漢の光武帝が特別なリサーチ能力を持っていたわけではない。倭人がそう言った。それを光武帝が認めて信用するに足りると判断したから、高句麗や百済・他に与えたことのない金印を与えた。その判断は正しかった。

ここまで話が進展するなどとは思いもしなかった。倭人伝を読むルールとして、そう読んだにすぎない。倭人伝を読む姿勢として、削除することは出来ませんと言ったに過ぎなかった。それが思いもかけない大きな反応に到達した。

（編集による　別講演の説明追加
倭奴と凶奴は一対の言葉である。凶奴はヨーロッパのハンガリーからバイカル湖そして万里の長城の端までが活動領域である。その凶奴に匹敵する倭奴の領域が太平洋である。）

この話も言い出すと切りもないが、一つだけ示しておきます。ここに写真がありますが、右側の二列が日本の縄文土器、左側二列が南米の土器、言わなければどちらかはおそらく区別できない。それだけ良く似ている。そして似ていない要素もある。それはお人形さんである。このような人形は（日本の）縄文土器からはご覧になったことがないと思う。エバンズさんが人形の写真を送ってこられて何か覚えはないかと尋ねられた。気になっていたのでしょう。私は日本の縄文遺跡からは出てこない。しかし非常にジャパニイーズ・ライク、日本人好みの顔であるという御返事をした覚えがある。われわれ日本人には非常に親近感を持つ顔である。南米のインカ文明は、われわれから見て恐い顔をしている。我々とは非常に人相が違う。ところがこれは非常に日本人の顔とよく似ている。しかも日本人と同じ糞の寄生虫を持っていたというのは不思議な感じがしますね。『後漢書』の問題はそういう形で、もうしあげました。

三　『三国史記』の倭

お隣の国である韓国側の史書の問題に入らせていただきます。日本の『日本書紀』・『古事記』に当たる『三国史記』・『三国遺事』と言います。『日本書紀』・『古事記』よりは、成立はすこし遅く平安から鎌倉時代に成立した史書ですが、非常に深い内容を持っています。

この中で『日本書紀』に当たる『三国史記』の内容です。不思議なことが出てまいります。新羅の四代目の国王である有名な脱解王の件です。この人はもともと韓国の人ではないと言っている。どこの国の人か。多婆那国という国で生まれた。その多婆那国は倭国の東北一千里にあると書いてある。それで伝説的な表現ですが、生まれたときは卵として生まれた。それで格好悪いというわけで船に乗せて、卵を沖合いに流した。その卵はまず金官加羅国に流れ着いた。韓国の東の南端である。そこでも村人が、また気持ち悪がって沖に流した。その後（新羅の都のあった）慶州に着いた。それで漁民の老夫婦が卵を拾い上げて床の間に置いておいたら、ある日卵がぽっかり割れて見事な男の子が出てきた。その男の子は賢い男の子として育った。宮中に入って、第二代新羅王の娘さんと結婚した。第二代息子が第三代の王になったが亡くなったので、第四代の王になっ

た。それで新羅の国家体制が脱解王によって大いに整頓されていったということが述べられている。

それともう一つ不思議なことがありまして、「瓢公」という人物がおりました。「瓢」という苗字ですが、彼は新羅第一代の王赫居世の時、新羅に遣ってきた。そのとき腰に瓢をくくりつけていたので「瓢公」と呼ばれた。こう呼ばれた「瓢公」という人は、元「倭人」である。彼は二代から四代に渡って新羅の王に仕えた。国の実力ナンバー一というか、王の後ろのほんとうの王みたいな人で、実力をふるって新羅という国を作り上げた。そういう人物が瓢公である。

さらに不思議なことは、新羅の初代の王である赫居世と言われる人物についても書いてある。彼は「朴」を姓として名乗ったと書いてある。朴というのは韓国の朴大統領の姓と同じです。それを表せば瓢の事であるから、漢字で「朴」という姓を名乗った。ですから初代自身も倭人と深い関係がある。瓢は倭人とたいへん関係がある。だから新羅という国は、初代の王の赫居世といい、脱解王といい、瓢公といい、何か倭人と関係が深い感じである

『三国史記』　新羅本紀　第四代　脱解

脱解尼師今、立。（一云吐解）時年六十二。姓昔。妃阿孝夫人。脱解本多婆那国所生也。其國在倭国東北一千里。初其國王娶女國王女為妻。有娠。七年乃生大卵。王曰人而生卵。不詳也。宣棄之。其女不忍。以帛裹卵并寶物。置於櫝中。浮於海。任其所往。初至國海邊。金官人怪之不取。又至辰韓阿珍浦口。是始祖赫居世在位三十九年。・・・

それはさておき、今問題になるのは多婆那国がどこかである。「其國在倭国東北一千里。　その国は倭国の東北一千里にある。」とあり、その場合倭国を基準として、多婆那国のことを言っている。倭国がどこにあるかを考えなければならない。この「倭国」はどこにあるかは、非常にハッキリしている。なぜかというと建武中元二年（西暦五十七年）脱解王が即位した。その建武中元二年は、後漢の光武帝より、倭が金印を貰った年である。つまり倭が金印を貰った年に、お向かいの国で、王に即位したのが脱解王である。そうすると『三国史記』に書いてあるこの「倭国」は、博多湾岸の倭国しかあり得ない。金印が出ないところが、金印を貰うはずがない。つまりこの基準の元となった倭国は博多湾岸である。こう考えるのが一番筋が通った話である。そこから「東北一千里」とあれば、『倭人伝』で考えると大体の見当は付く。そこから短里で東北千里なら、壱岐が方三百里、対馬が方四百里なら大体の距離が分かる。壱岐の一辺の三倍強が千里です。博多湾岸から短里で東北千里行ったところというと、だいたいの見当はつく。ほぼ関門海峡あたり、今の山口県下関市あるいは福岡県北九州市あたり。ここなら『三国史記』の卵の説話がドンピシャリと説明できる。なぜかというと、ご存じのように宮本武蔵と佐々木小次郎の巌流島の決闘の話。その話で、お分かりのように巌流島は時間帯により海流が正反対に変化する。この関門海峡は、ある時間になるとパッと海流の向きが変わり、瀬戸内海側に流れたり、逆流して玄界灘側に流れたりしている。下関の講演会の時にもお聞きしましたが、その通りですと返事があった。それは昔も変わらないようです。もし人間の乗らない卵を載せた船を流すとします。その時間帯によっては内側に流れれば瀬戸内海に流れる。また時間帯によっては外に流れる。外に流れれば、目の前に流れているのは対馬海流。その対馬海流は、関門海峡の沖で、目の前で二つに別れる。我々が普通対馬海流と呼んでいるのは、北海道へ行く方である。日本海に沿って北陸から津軽へ進んで行くのを対馬

海流と考えている。実はもう一つの対馬海流がある。分流があるわけで東鮮（東韓）暖流と言いまして北上する。竹島の沖合いに行き、そこでウラジオストックから下りてきた寒流とぶつかる。エクアドルがそうでしたが、暖・寒流がぶつかるところが大変魚が捕れる。それで、もし関門海峡から北上してきたら、時間帯によるが一番弱く出てきた場合は対馬海流に乗り北海道に行く。もう少し強く出てきて海流に乗った場合は東鮮暖流に乗っていく。それで韓国の最南端金官加羅国をよぎる。もちろん新羅の慶州にも行く。それで多婆那国から卵が来たケースなら、この話が成り立つ。まったく話が合う。自然地理が話を裏付けしている。もちろん卵で遣ってきたという話自体がナンセンスだから、合理的に考えても仕方がないという考えもあるが、そうではないと考える。

この『三国史記』の話を聞いているのは新羅の人たちである。目の前の東鮮暖流のことは百も承知の人々である。その海流の論理を抜きにしてお話を作っても、民衆は相手にしない。民衆が知っている海流の論理に乗った話としてこそ、話が成り立つ。それでは成り立つのは何か。倭国の東北一千里、多婆那国が関門海峡付近にあったとすれば、話として成り立つ。あの話、私も知っているよとなる。もし多婆那国への千里が長里であれば、漢の里数ならば六倍ぐらいの長さにある。倭国から東北一千里なら、一度計算してみたら能登半島ぐらいになる。能登半島の沖合いに無人の卵を載せた船を流しても、慶州や金官加羅国に流れ着くことはあり得ない。海流を逆行するだけで、だんぜん無理。まして倭国を奈良県の大和（ヤマト）と考えたら無茶苦茶であり、お話にも成らない。だからこの話自身が、あの倭国が博多湾岸という仮説に立てば、ぜんぶ話が合理的に成立する。なおかつ卵自身が成長したとき、脱解王として即位した時には、博多湾岸に倭国の中心として中国から金印が与えられている。ですから、その金印の出てくる「委奴」。その「委奴（wido）」とは何者か。ぜったいに大和（ヤマト）ではあり得ない。その金印と『三国史記』の「倭（wi）」を、倭語でいうならば筑紫（ツクシ）。現地の人は筑紫（チクシ）と発音する。意味は同じですが、「チ」は千という意味のめでたい言葉がくっ付いている。あるいは神様としての「チ」。そういう「クシ」という語幹に対して、「チ」というめでたい言葉がくっ付いている。それに対して外からは「ツクシ」と呼ぶ。「ツ（津）」は港です。港のある「クシ」の地。外から来た人は港から来た。それで「クシ」ということは一致している。それで「委奴（いど）」国の「倭（wi）」は、筑紫（チクシ）である。これにおそらく、反対の人はいないと思う。いやいや金印の「委」は大和であると頑張る人はいないと思う。しかしこれはこれからの話に、非常に重要なことである。

なぜならば金印というのは金石文であり、一番確実な同時代史料です。そこにまず出てくる「委＝倭」が筑紫（チクシ）である。それが第一の原点。しかもお隣の『三国史記』。言い換えたら日本側の権力の、ご都合には関係ないと言うことである。天皇家に遠慮したり、おべんちゃらしたり、反発したり、そういう事には、まったく無関係である。それがお隣の歴史書の値打ちである。その『三国史記』で倭国と言っているのは博多湾岸である。お話から見ても、同じく博多湾岸である。お話以外の新羅の脱解王が即位した年が、倭国が金印を貰った年であるところから見ても、博多湾岸と考えざるを得ない。どっちに転んでも『三国史記』にまず出てくる「倭」は、博多湾岸であるということをだめ押しせざるを得ない。そうすると、ひょうひょうとして瓢（ひさご）を腰にぶら下げて新羅に来た瓢公も倭人であり、基本的に筑紫（ちくし）人と呼ぶべきものである。その周辺でも良いですが。彼を大和人であると読む人はいないと思いますが、読んだら全

然ダメである。基本的に彼は筑紫(ちくし)人と呼ぶべき人である。この問題『三国史記』の最初の「倭」をどう読むかということは人はあまり触れませんが、これは非常に大事なことだと思います。

なぜ、これが大事だというと『三国史記』はこの後「倭」だらけ。倭の記事が、これでもか、これでもかと出てくる。だいたい倭人が侵入してきて、これを撃退したような記事ばかりである。これ自身も非常におかしいのですが。倭人が加害者ばかりで、いつも三国側が被害者ばかりというのは、歴史上はあまりありえない話である。これも一つのセレクトが働いている可能性があると思いますが。

これもついでに言っておきますが、皆さんはあまりご存じないが、福岡県の図書館に行かれますと、そこには神代史料、神社史などの双書がある。それを見てみると、博多に来た新羅や唐を始めとする異国の侵入記事が一杯ある本がまとめられてある。皆さんは御存じないと思うが、現地にはきちんとそういう本が残っている。それにそうでしょう。行ってばかり、攻めてばかりの人とか、逆に常にやられてばかりで攻めはしませんという、そういうお人好しの人間もまあ余りいないと思う。お互いに大小はあっても、やり合うのが当たり前である。とにかくその話は直接関係しないから、この辺で止めますが。

とにかく元に戻り『三国史記』には、「倭人がやってきた。」という話が繰り返し、巻き返し出ている。「その倭とは何者か。」ということである。それはきちんと書いてありますよという事です。本は途中から読むものでない。初めから読むものである。初めに、ちゃんと「倭」について書いてある。多婆那国は「倭国の東北一千里」にある。そこに多婆那国がある。しかも地形から考えて倭国は当然博多湾岸にある。倭国の位置は非常にハッキリしている。

しかも脱解王の即位した年は、漢の中元二年（西暦五七年）と書いてある。脱解王の即位したあの年に、倭国は金印を貰った事は知らんという人に限って『三国史記』を読むことはありえない。それを知らないで読む人はいない。きちんと『後漢書』にも書いてある。『後漢書』を読まないで『三国史記』だけを読む人はいない。金印のあの年に（新羅の）脱解王は即位したと言っている。そうであるならば脱解王のところに出てくる「倭国」は、その事からもあの金印の倭国は博多湾岸である。そう思って下さいと言っている。

その後、そう思ってもらっては困るという記事は、一回も出てきていない。現在は幸いなことに岩波文庫で佐伯有清氏が編集された『三国史記』の倭人の記事を一冊にまとめられた本がある。その本を見て、「その後の倭国は先頭にある倭国とこれは違いますよ。」という記事が、一回も出てこない。また「これ違いますよ。」という注記もまったく出てこない。まったく無いということは、それは注記を忘れたのではなくて、『三国史記』は、そう思って下さいと言っている。そのために変な卵の話が先頭に出てくる。そしてもちろん『三国史記』のなかに、白村江の戦いも出てくる。これは新羅が唐と組んで、倭国に大勝したこの記事は『三国史記』の華(はな)ですよ。その華(はな)の相手の倭国も、博多湾岸の倭国と見て下さい。そのように言っている。

私が今まで言ってきたことの中に論理的におかしいところがありますか。私はぜんぜん無いと思う。ところが私以外の今までの学者は、全員そうは読んではいません。少なくとも四・五世紀の好太王碑の解釈を始め、天皇家中心の時代に決まっているいう形で扱っている。

その場合どうなるかと言いますと、まさか先頭の脱解王の問題をどう解釈するのでしょうか。まさかあの倭を奈良県と解釈するのでしょうか。また長里で一千里と解釈するのでしょうか。多婆那国

は津軽の方ですと解釈するのでしょうか。そんな人は誰もいない。そんなことを言ってみても、成立するわけではない。それで『三国史記』に触れなければ、あの説は消えるわけではない。あの話はつまらん話を書いていますね。あれは相手にしないことにしよう。日本の学者はそういうことは言ってはいないけれども、日本の学者は全部そういう態度です。しかし生意気ですけれでも、それは『三国史記』という本の読み方になっていない。本は先頭から読むべきである。「倭」とでてくる最初のところに、倭国の位置を示している説話がある。しかも金印と関わりがある「中元二年」という年に、脱解王が即位した年と先頭に書いてある。倭は博多湾岸、筑紫（ちくし）と読んで下さいと書いてある。そのあと変更しますという記事は出てこない。だから後は、ずっと筑紫（ちくし）と読んで下さいと言っている。後で日本という名前に変わりますけれども、それまでは、そう読んで下さいと言っている。私は以前からそう思ってきたけれも――東京を中心とした方々と、韓国に古代史の旅行に行った。行く前に史料を調べ直して、――今の事を確認した。こんな一番大事なことを今まで言わずに来たなと思っている。強調しなければならないことを、見落としていたことを恥ずかしく思います。

四『古事記』の倭

須勢理毘賣命の嫉妬

またその神の嫡后須勢理毘賣命、甚く嫉妬したまひき。故、その夫の神わびて、出雲より倭國に上りまさむとして、

しかし、それは『三国史記』という隣の国のことと違うか。日本の国の記録の場合はそんなことになっていないよ。そのように思われる方があるかも知れないので、さらに『古事記』について述べさせていただきます。

ここで『古事記』でポイントとなるところを書き抜いて挙げてあります。それは大国主命のことですが、「出雲國より倭國に上りまさむんとして、」そういう表現が出てくる。これを従来は、本居宣長先生が『古事記伝』の注釈をされて以来、疑わずに「倭」を「ヤマトの国」と読んできた。しかし出雲から大和に行くのに、なぜ「上る」と言わなければならないのか。天皇がいらしゃるからだ。国学の立場から言えば、天皇のおられるところが永遠の原点であるという立場で解釈して、それで良かった。しかし大国主の時代に、奈良県が永遠の原点であるとは考えられない。

じゃ何か。非常に簡単である。あそこには対馬海流がある、出雲にも流れている。普通は我々は川を昇るとき、「あがる。」という言葉をよく使います。それは陸地人間の使い方である。海上民にとっては河以上の河が海流である。海流を上がるのも当然ながら「あがる。」と言う。下るのも、「くだる。」と言う。出雲から北海道へ行くのは下がる。出雲から九州へ行くのは上がる。自然地理にもとづく本来の用法である。権力関係なしの自然的用法である。それで上がっていったら当然倭国・筑紫（チクシ）の方へ行く。この文章はそう読んだら何もおかしくはない。

故、大國主神、胸形（むなかた）の奥津宮に坐す神、多紀理毘賣命を娶して生める子は、味遲鉏高日根神。次に・・・

（味遲鉏高日根神という神が、いわゆる「国譲り」以後、出雲の中心の神様になる。）

しかも上って行って誰に会ったかと言えば、天照大神の娘さんに会う。それで宗像の沖の島の沖津宮で、ーーここは天照大神の子の三人の娘が祭られていることは有名であるーーその一人に会いに行った。会って、そこで結婚して子供が出来た。味遅鉏高日根神はその子供である。こう言っている。

なぜ出雲から奈良県に行く途中で、宗像（むなかた）へ行くのですか。ぜんぜんナンセンスじゃないですか。しかし出雲から筑紫へ行く途中なら、宗像・沖の島に寄るのは当たり前の話である。普通の文章で「倭」とあれば「大和（やまと）」である。わが国では永遠の中心が大和であるから「ヤマト」としか読ませんというところから出発するのが国学である。国学というイデオロギーを抜きにして、ヤマトが中心だからということを棚上げにして、文章として素直に読めば、この倭国は当然筑紫国である。

この話は『古事記』の早い段階で出てくる。ということは、これは、この後から「倭」と出てきたら「筑紫（チクシ）」国と読んで下さい。そのように言っている。先ほどと同じ論理です。もし、ここだけが筑紫（チクシ）、後は大和（ヤマト）と読んでくれと言うならば、ここから方向転換を行う。ここからは大和（ヤマト）と読んでくれという標識は初めには無い。倭は筑紫（チクシ）と読んで下さいと『古事記』は主張している。天武天皇や筆記者や伝承者は、皆そういう立場に立っている。

ところが転換点はないかと言えばある。誰でもが知っている有名な「倭健（ヤマトタケル）」説話である。あの「倭健」説話の中に、ひじょうに変な話がある。九州に行って、少女に化けて宴会で会って相手である熊襲健（くまそたける）を切り殺す。切り殺すのは仕方がないが、切り殺されながら相手がいう言葉が変ではないか。「大倭の国に、私より強いものはないと思っていたが、あなたがいらっしゃった。これから、あなたは倭健とお名乗り下さい。」と言った。そんなの、ありですかね。死ぬときに相手に名前をお譲りしますという馬鹿な話、変わった人は見たことがない。それから少女に化けるという話もかなり苦しいが。いわんや、それは卵から生まれるという人間もあるから一つのお話として我慢するとしても、死ぬときにそんな大事なことを言って死ぬという話は聞いたことはない。

しかもあの話は、『古事記』にとっては大変重要な話である。なぜかと言えば、あそこで初めて、ここから「チクシ」の倭を、「ヤマト」と読んで下さい。ここから「倭」を「ヤマト」と読んでも良くなった。あの倭健（ヤマトタケル）はどう見ても、筑紫健（チクシタケル）ではない。「倭健」を「ヤマトタケル」と言うためには、ただ言うわけにはいかない。こういう事件がありましたので、ここから後は「倭」を「ヤマト」と呼んでも良いことになりました。『古事記』の一番のハイライトといって良い場所が、あの説話です。もちろん、この事件は歴史事実ではない。この話を天武天皇が作ったのです。倭健（ヤマトタケル）説話はわたしは大好きな説話です。しかし歴史事実として見ると、ほとんど作り話です。文学作品としては造りモノで良いのですが。それも現地の英雄達の話を取り入れて、主語を倭健（やまとたける）にして作り替えた。それも現地の英雄A・B・C・D・E・Fの首を取ってしまって、主語をぜんぶ倭健（やまとたける）に入れ替えた。そういう説話であることが分かって来て、少年時代からこの説話が好きだった私としてはひじょうにガッカリした。しかしガッカリしようと、どうしようと、事実はその通りでございます。そのウソ話、この目立つ話をなぜ入れたかという一つの大きな理由として、ここから「倭」は「ヤマト」と呼んでも良いことになりました。

もちろん現実には何を意味するかというと、「倭」を「ヤマト」と読もうとしたのは天武天皇。ご存じのように天武天皇まで、外国史書の分析で示しましたように白村江までは、「倭」は筑紫（チクシ）と読まれてきた。ところがそれを「倭」は「大和（ヤマト）」と読むというアイデアを、天武天皇は考えつくわけです。表記法の方法論をうまく使いまして導入しようとした。

しかしみんな「倭」を「筑紫（ちくし）」と読んでいるところへ、いきなりそう言っても通用しません。そこで、これは私が新たに言い出したことではなくて、実は根拠があるのです。この説話があるからです。倭健が九州に行って、殺した相手ですが譲り受けるというお許しをえたという事があるので、私が今言おうとしている「倭」は「ヤマト」と読もうとしたやり方は、決してわたし一人がただ思いついたことではありません。この事件以来、「倭」は「大和（やまと）」と呼んでもいいことになったのだ。そのように天武は言いたかった。そういう『古事記』の持つ主張の重要なポイントだと思う。

それを本居宣長が国学のイデオロギーで、最初から『古事記』の倭を「ヤマト」であると読んでしまった。そのために、あの話がまったく宙に浮いてしまった。単なるまったくの作り話になってしまった。有っても無くてもあんなものはかまわんよ。そういう無意味な話になっしまった。しかしこの話はほんらい無意味どころか、『古事記』にとって、本来は非常に重要な話である。比較的最近、そのことに気が付いて愕然（がくぜん）とした。

以上、『古事記』自身が大国主の説話が強調しているように、倭はチクシであることを強調しているわけです。わざわざ沖の島のフレーズを入れて筑紫であることを強調している。なにもわざわざ筑紫を入れず、直接沖の島に行けばよい。あのフレーズを入れているという事は、倭というのはみんなが知っているとおりの筑紫です。こう言っている。

ついでに申しますけれども、神武天皇につきまして『古事記』の序文がある。あまり長くない序文の中に、この序文の最初二行目に「神倭天皇」と出てきて、最後のほうに出てくるときは「神倭磐余彦天皇」となっている。これは何か。本居宣長をはじめ、これに注意した人は余りいないように思う。その間に入っているのは当然ながら、神武が九州を出て、近畿に入って大和を征服し支配したということが間に入っている。美しい文章で飾られて述べられている。つまり大和に入ってきたから「磐余彦」という名称を名乗るようになったと言っている。（九州から）大和に入ってきたという時の話には「磐余彦」は無くて、大和に侵入した後の話には「磐余彦」が付く。この考え方は、ひじょうに筋が通っているでしょう。

それでは、その前にある「神倭」はなにを意味するか。「倭」は何者か。はたして「大和（ヤマト）」か。今までわたしも含めわれわれが考えてきたのは、磐余（いわれ）と言うのはご存じのように大和（やまと）にある。だから「神倭磐余彦（カムヤマトイワレヒコ）」は、何も問題ないなと思ってきた。しかし、よく考えたら大変問題である。なぜならば磐余が大和にあるから、「倭（ヤマト）」を被（かぶ）せる。しかしそう言うのならば他の地名も、大和にあるからいっぱい出てくる。文章にも出てくるし、人の話の中にも出てくる。そうであるならば「倭（ヤマト）」を、本当なら地名にも人名にも全部被（かぶ）せなければおかしい。大和にあるのだから。しかし使っていない。使っているのは神武だけ。理由になっていない。これはおかしい。

磐余（いわれ）は大和にあるから、「倭（ヤマト）」を被（かぶ）せるという話は、一応そのように見えるが、良く考えたら大変おかしい。これは何か。この「倭」は、また「倭（チクシ）」である。本人は筑紫から来たことを、たいへん誇りにしている。だから「倭（ちくし）」を名乗りの頭にかぶせている。

同様に最近読んで面白いと思ったのですが、フィリッピンの東のパラオ諸島。パラオの人々は地名を持って移動する。地名を頭にかぶせている。つまり地名を持って「名乗りの姓」に使う。つまり「どこそこに住んでいる太郎兵衛」と名乗る。それを地名を引っ提げて移動・移住する。そういう習慣がある。『パラオの神話』（三一書房）に出ています。これはどこでもある、おもしろい話です。

それと戦国時代黒田公が、岡山県から福岡県に移住するとき、「福岡」という地名を持って移動した。岡山県では福岡という丘に住んでいた。博多に来るときに、その名前を持って移った。博多には大した丘はないのに「福岡」と名を付けた。それが福岡市・福岡県のはじまりであることはよく知られています。博多は古いけれど。そういう例は、いくらでもある。アイルランドからアメリカに移住するとき、地名を持って移住してきた。そういう人類的傾向がある。この場合もそういう人類的傾向の一つである。

だからそれと同じように、これはそういう人類的傾向の一つで、彼らは倭（ちくし）から出発したから、「倭（チクシ）」の名を持って移動していた。筑紫から来たこと、それを誇りにしていた。それでは「神（カム）」は何か。これも神聖な存在だから「神」を付けたと、従来は説明する場合はされていました。これも従来はそれで納得していましたが、よく考えたらおかしい。それではアマテルは「神」は付いていないが、彼らは神聖でないのか。ニニギも「神」は付いていないが、彼はダメなのか。そんな屁理屈を言っては困ると言うけれども、子供はそういうことを聞くだろう。だから神聖なという解釈はやはりダメ。

それでは何か。最初には『日本書紀』の解釈などから、神武を南九州出身だと誤解していました。現在は神武の出身は、北部九州、糸島・博多湾岸の出身である。その証明を一生懸命行ってきました。その一つに糸島郡に神在（かむあり）村がある。「あり」の「り」は、吉野ケ里（よしのがり）の「里（り）」と同じ集落の単位で、「あ」は、我（われ）などの意味の接頭語と考える。「あたい」とも言いますから。そうすると「あり」は、「我が町・村」の接尾語です。そうすると語幹は「神（かむ）」である。神武は倭（筑紫　ちくし）の中の神（かむ）・神在（かむあり）の出身だと言っているように見える。

ところがこれは、名乗りの順序は逆であり、日本語だったら「倭神（ちくしのかむ）・・・」となるけれども、中国風である。閔越（びんえつ）、越の国の中に閔があるから閔越（びんえつ）という。韓国の中に拘耶（こや）があるから拘耶韓国。順序は、大きいを方を下に書いて、小さい方を上に書く。これが中国風の名乗りである。神武は中国風の「名乗り」をしている。「古田武彦」ではなくて、「武彦古田」である。中国風のバタ臭い言い方をしているのが「神倭（かむちくし）」である。そこへ倭（ちくし）の神（かむ）から来たから「神倭（かむちくし）」である。そして大和の「磐余（いわれ）」に来たから「磐余彦」。合わせると神倭磐余彦（かむちくしいわれひこ）となり、そう理解すると何も問題は起こらない。変な解釈をせずにすむ。

無理に神聖な人だから「神」を付けると言うと、それではニニギやアマテルは神聖ではないのかという屁理屈を言われる。また神武は大和（ヤマト）にいるから「倭（ヤマト）」を付けると言うと、じゃ他の人はなぜ「倭（ヤマト）」が付いていないか。そういう変な問題は解消する。

以上のように、ここでも太安万侶は「倭」を筑紫（チクシ）と読んでいる。ここでも先頭に神倭（カム　チクシ）天皇、大和に来た後には神倭磐余（カム　チクシ　イワレ）天皇と書いている。表記は明確に示している。ところが本居宣長は太安万侶がビックリするような皇国史観で、すべて倭をヤマトと読んだために、大和は永遠の中心だというふうに読んでいたので、今述べた問題は、全部素通りになっていた。

以上繰り返しますが、『古事記』においても倭は筑紫（ちくし）である。他方『日本書紀』は新しいやり方を行ったわけです。先頭に「大日本」を日本（ヤマト）と呼べと、最初から注に書いてあるように「ヤマト」と成っている。『日本書紀』は遠慮会釈なく、最初から日本はヤマトとなっている。（おそらくそういうやり方で、倭とあってもヤマトなんでしょうね。）そういうやり方で書き直した。『古事記』はもっと可愛らしく、遠慮気味であって、今まで読んでいた倭（チクシ）を倭（ヤマト）と読んで良くなった謂（いわ）れはここにあります。そのようなお話を作って、そのことを主張している。両方タイプは違っている。

だから『日本書紀』が出来たら、『古事記』はチャラ、キャンセル。我々は両方比べて非常に有り難いと思っているけれども、『日本書紀』を作った人から見ると『古事記』はあってもらっては困る。だから姿を消していた。だから『日本書紀』の、天武天皇のところにも稗田阿礼に暗唱させたという話は一切無い。また『続日本紀』の元明天皇のところにも『古事記』を太安万侶が撰進したという話は一切出てこない。歴史から全く姿を消されてしまった。

以上申し上げたことは、倭というのは金印が示しますように「筑紫（ちくし）」と呼ぶべきものである。本来の「倭（wi）」に日本語の読みを与えれば「筑紫（ちくし）」と呼ぶべきものである。

その点は朝鮮の『三国史記』もまったく基本的には変わらない。『三国遺事』も同じ。それから基本的には『古事記』もまた同じである。それを「倭」をヤマトと読み換える苦心が『古事記』を作った重要な目的の一つになっていた。それをすべてご破算で、いきなり日本・倭をすべてヤマト（大和）と呼ぶことに切り替えたのが『日本書紀』である。

五　三種の神器について（説明の追加）

まず皆さんにお配りしたカラー写真の説明から始めさせていただきます。

これは現在の韓国の大統領金大中（キム・テジュン）さんの出身地の近辺とみられる光州咸平（カンペイ）草浦（ソホ）里遺跡から出てきたものです。これはその報告書です。もちろん韓国語で書かれた貴重な報告書ですが、一般に売っている物ではありません。それで皆さんにお伝えするの

に、先頭の写真を研究用ということカラーコピーさせて頂いた。ですからそのことを考慮されて、このコピーを取扱って下さい。

その遺跡の中から、剣と鏡と勾玉とは言えないが玉は勾玉風の物ですが、その三つが出てきました。もちろんこれは棺の中から出てきました。周りからは、棺の外からは我々から見ると不思議な呪術的なもの、何に使うのか曲がった形の銅器、お医者さんの手術に使うような曲がった形。そのようなものが出てきております。日本の遺跡ではあまり見ない物ですが。

一体これは何だろうと考えていたのですが、今回の奈良県田原本町の黒塚古墳の棺の中から三種の宝物が出てきてのを見てハッキリ理解した。これが意味することは、棺の中からの三種の宝物（神器）が大事なのである。いわゆる呪術的な・道教的なものは附属のかたちで外にあった。そういう位取りは明確に分かりましたので、黒塚古墳は貴重である。

これが意味することは、お分かりのように三種の神器は朝鮮海峡の両岸に跨（またが）っている。

小型仿製鏡、時期は遅く倭国産ですが、それを含む三種の神器が、斧山の近辺である金海からも出てきております。その他幾つかからも出てきています。朝鮮半島南岸部も結構三種の神器が分布する地帯です。九州北部も三種の神器が分布する地帯である。九州と朝鮮半島両岸に跨った所が倭地である。そういう言い方を韓国の人は嫌いますが、われわれは現代のナショナリズムというものに関係なしに、歴史事実を認識する立場です。

返す刀で言うと生意気ですが、今宮内庁の管理している天皇陵の、初め神代三陵は鹿児島県にある。ニニギノ尊からウガヤフキアエズまですべて鹿児島県にあるという形で、明治の初め薩長政権が権力を握るやいなや、すかさず公定した。天皇陵にもいろいろあるけれども、重要さに順序はないというけれども、やはり一番大事なのは元祖の天皇陵、神代三陵である。その元祖の天皇陵を鹿児島に決めた。しかしみんな嘘だった。あんな所に三種の神器があるはずがない。隼人塚の世界。三種の神器は、今言ったように対馬海峡の両岸に広がっている。それを完全に宮内庁は見失っていた。宮内庁が見失ったというのは江戸時代の薩摩国学が見失った。それがお国自慢というか神代三陵が鹿児島県にあることを主張していた。それを薩長政権が取り入れて公定した。当時の事情としては仕方がないが、嘘はウソ、間違いはマチガイ。結論はハッキリしている。朝鮮半島南岸部と九州北部にまたがった三種の神器が分布する地帯が、弥生時代にあったというという事実は動かせない。

そこも不思議な話ですが、草浦里（ソホリ）という所である。『日本書紀』では、天孫降臨は筑紫の日向（ひなた）の高千穂のクシフル嶽が天孫降臨の場所であると、かねて主張しています。そこに不思議な地名がある。「添（そおり）」（一書第六）と書いて現地読みが付いている。ソホリである。ちゃんとこう読めと書いて有る。もちろん草浦里、これはもちろん、これは韓国読みでは、このようには読めませんよ。しかし日本読みではソホリとなる。日本語読みの方が本来ではないかという、ビックリするような問題も覗いている。これもお話を始めると長くなるので、問題提起のみにさせていただきます。とにかく今の韓国光州の草浦里遺跡の件は非常に重要な遺跡であると思います。さてそのようなことをお話した上で次のテーマに入らせていただきます。

六『宋書』の倭

さきほどお話ししたことは、わたしの本をお読みの方は良くご存じです。しかしわたしの話を初めて聞く方は、理屈は理屈ですが、それはちょっと、それは受け入れられないよ。そのように思われる方が率直に言って少なくないと思います。そこで今度は中国の歴史書『宋書』について、述べさせていただきます。ここで有名な「倭の五王」が出てくる。倭の五王というのは、今の近畿の天皇である。雄略が倭王武であって、他のものが、それにならぶ天皇である。今の教科書などでは定説のように書いてあります。しかし、わたしなどから見ると「全然定説ではない。」というよりも、間違っています。

『宋書』倭国伝冒頭

倭國在高驪東南大海中世修貢職

それで『宋書』の前にある歴史書は『三国志』なのです。『三国志』は三世紀、『宋書』は五世紀です。『後漢書』ができたのと同じ五世紀です。

ですから『宋書』を読む人はもちろん『三国志』を読んでいる。書いた人ももちろん読んでいるし、読者ももちろん読んでいる。そこで『三国志』で言っている倭国は、この『宋書』の倭国だ。こう理解する。当たり前ですね。

もっと突っ込んで言いますと、後漢の光武帝が金印を与えた「漢の倭奴国王」、あの「倭」である。あの「倭」が卑弥呼（ひみか）の倭国である。又「倭の五王」の『宋書』の倭国である。これは、こう読む他は読みようは、ないですね。

「『三国志』の、あの倭国と違いますよ。同じ倭国でなく、同じ名前でも、もっと東に寄った、別のところの大和の倭ですよ。」と言うならば、そう書けばよい。

また後漢の光武帝が金印を与えた倭、あれは一番有名な倭です。あれは本に書いてあるだけではなくて、今の洛陽の真ん中で倭国の使者に与えたものです。別に宅急便に乗せて送って来た物ではない。金印を貰うには、こちらから使者が行って華やかな儀式の中で、たくさんの人間が見守る中で金印を貰った。なぜかというと、これは金印を貰う方が有り難いだけでなく、もしかしたらそれ以上に与える方に意味がある。つまり国民に対するコマーシャルなのである。

つまり我々は「後漢の光武帝は大したものだ。間違いないよ。」とこう思うけれども、それは現代の人間の後読みであって、当時は光武帝は大変いかがわしい。前漢が滅んで新の王莽が受け継いだ。その新の王莽に各地で反乱を起こして、その反乱で勝ち残ったのが光武帝である。「私は田舎から出てきたように皆が思っているが、何を隠そう（前）漢の劉氏の一族である。」と劉を名乗り、（後）漢を称する。漢を継承する。しかし本当に光武帝が劉氏であるかどうか、「誰が知るか。」と言うようなものである。最後に勝ち残ったのは誰も知っている。本当の筋はどうかということは誰も知らない。そういう意味では、大変いかがわしいわけである。

そういう中で、天子という名分を確立する仕事がある。戦闘に勝ったから、もう良いという訳ではない。勝ったのと同時に、それを大義名分で正統性を裏付けして行かなければ権力者としては長続きできない。そういう立場の最中が光武帝です。ですから国内に対してのみならず、国外からも、これだけ新しい漢に対して従順を誓ってきた。そういうことは、国内の国民に対する最大の宣伝です。

ということで、金印を与えるという作業は、与えられる本人はもちろん嬉しいでしょうが、のみならず与える方にとっても非常に意味のある大事な行為である。これはわたしの想像と言えば想像ですが、おそらく間違いはないと思う。

ということは、晴れがましい儀式で、誰もが知っている倭である。しかもこの時には『漢書』を書いた班固は、当時太学の学生で洛陽にいた。その班固にとっても「倭」というのは、金印の倭である。その金印の倭が「楽浪海中倭人有」と『漢書』の中に出てくる「倭」の説明になっている。金印を貰った倭人は、何を隠そう「楽浪海中」の中にいる。つまり中国にとっても金印の倭は、金石に表された明確な倭である。もちろん『後漢書』に出ている「倭」も、明確な倭である。『三国志』に書かれた倭も、もちろん金印の倭を受け継いでいる。金印の倭から場所が変わったという事は全然書いていない。

これも一言追加しておきますが、『三国志』倭人伝の中で、卑弥呼の前に男王が居て、七・八十年居たと書いてある。二倍年歴で半分だと思いますが、それでもかなり長いでしょう。あの男王は絶対に漢の時代の人間である。卑弥呼は魏ですが。その人物の生まれたのも、その治世も漢の時代である。その漢というのは、鏡でいえば漢式鏡の人である。その漢式鏡の人の七・八十年後、卑弥呼の都は場所が変わりましたとは書いていない。

ということは漢式鏡の世界と卑弥呼の世界とは、都の場所は変わっていない。そういう細かい面白い話もある。

元に戻り大筋では、金印の倭は、筑紫である。疑いない。志賀島から金印が出たのですから。その金印の倭を、それを受け継いだのが卑弥呼の倭である。卑弥呼の倭国が、金印の倭国から場所が変わりましたよということは、中国側は一言も書いていない。もし『三国志』の倭国が金印の倭と場所が違うというなら、中国が何をさておいても書くべき事柄であり、何もあれだけ他のことを書く必要があるでしょうか。もし金印の倭と卑弥呼の倭が場所が違うというならば、一言だけ「卑弥呼の倭は同じ倭と言っても、金印の倭から場所が東に寄りました。」とこう書くべきである。その一言がないということは移動していない。金印の倭国と同じだ。少なくとも中国人にはそうとしか読めない。

天皇家のご都合で、オベンチャラを言うとか、いろいろ読もうとしているけれども。それはこちら側の都合であって、そういう日本側の都合に関係のない中国側では、『三国志』を読む場合、金印の倭国は卑弥呼と同じ倭国である。そう読むほかない。同じく『宋書』の倭国も、金印の倭国・『三国志』の倭国と替わったとは書いていない。『宋書』倭国伝の冒頭に「倭國在高驪東南大海中世修貢職」と書いてあるが、「あの金印以来の倭国は高驪の東南、大海の中に在る。」、そのように『宋書』の倭国も読まなければいけない。「世々、貢職を修む」というのは意味深くて、金印を貰ったのも、卑弥呼が貢ぎ物を持っていきましたのも、そのご存じの話を、ぜんぶこの一言で納めてある。

以上『宋書』を読むのに、読者を中国人と考えたらそう読める。なにも不都合はない。それを我々は、これを読み変えて、しかし武は雄略、これはなんとか、これはなんとか、というふうに読んでいるけれども、そんな天皇家の御都合には中国側は全く関係ない。中国側で読むときには、今私が言った読み方をする他はない。そう言うことを今申し上げさせて頂きました。

ですから、『宋書』の倭は、筑紫国の倭である。倭の五王は筑紫の五王と呼ぶ他はない。

それを近畿天皇家の王、五人の内四人まで名は合わない。治世年代は倭王武は雄略と合わない。いくら合わなくとも雄略が倭王武であるというのは、学者が基本事実において間違っている。学者の大きな判断ミスである。判断ミスという以上のものである。明治以来の天皇家一元主義の最後の段階である。わたしの方からはそう見えるわけでございます。

七『隋書』の倭国

さてその次は『隋書』にまいります。これは唐の初めに出来たものです。この中に有名な「其國書曰日出處天子致書日没處天子無恙云云」という名文句が出てきます。

これを聖徳太子だと明治以来扱っていて現在に至っているわけでございます。しかしこれは非常に見えすぎた矛盾を持っているわけでございます。日の出ずるところの天子、多利思北孤という名前で出てまいりますが、奥さんがいまして鷄彌という形で書かれております。ところが、これを推古天皇とするわけです。推古天皇というと女帝ですが、奥さんがいて後宮の女六・七百人名がいる女帝は、あり得ない。あんまり矛盾しすぎているから、説明しなくても良い。学者は誰も説明しない。

倭王姓阿毎字多利思北孤號阿輩鷄
・・・王妻號鷄彌後宮有女六七百人名太子爲利歌彌多弗利無城郭

時たま説明する人は、聖徳太子は大変な演技を行ったのだ。天皇が女帝であるというと、外国に馬鹿にされると思ったので、うそを付いて男だといった。しかも後宮に女がたくさんいるのだと、大嘘をついて彼らを煙に巻いた。彼らはそれを信じ込まされて帰った。そういう解説をした人がいる。

わたしは、やはりこういう説明は、はっきり言って説明になっていないと思う。中国人を馬鹿にし過ぎるのではないでしょうか。ウソを付いて女を男と言いくるめて、向こうはそれを信用して言いくるめられて書いた。中国人はその程度の知能指数だ。

そういう歴史学を、それを歴史学と言えるかどうか知りませんが、日本では通用しても世界では相手にされないのではないか。通用しないのではないかと、わたしは思います。

それから倭（タイ）国は、私はこれでよいと思う。率直に言いまして、中国側から見れば、多利思北孤側が勝手に国号を作って、「倭国」と名乗ったと思う。そして国書に「倭」国と書いてあったから「倭国」と中国側は書いたと思う。当たり前の考えですが。しかし、その後中国側は夷蕃の国が勝手に国号を作って名乗ってきた。中国側としては認めがたいということで、『旧唐書』以後は採用しない。しかし本人は倭国と名乗ってきたのを、中国側が勝手に国名を作って、ありもしない国名を空想で書き込むというような、中国はそんな国ではない。これは倭国側が、正式の国書に正式の国名として書いてきたから、これを記載した。そのように考えるのが筋からいって正しい見方である。それを日本の学者はこれを何かのミスだ。何かの間違いだとしてとしてカットして倭国に直している。

また『隋書』倭国伝に有名な言葉がございます。

有阿蘇山其石無故火起接天者俗以爲異因行祷祭有如意寶珠其色青大如鷄卵夜則有光云魚眼精也

阿蘇山あり。その石、故無く火起り、天に接する。

「阿蘇山あり。」今読んでなつかしいですが、私が『失われた九州王朝』を書く前にも。一生懸命阿蘇山を、近畿大和に探したなつかしい思い出があります。これは今から考えれば馬鹿みたいな話です。あるはずがない。これは九州の阿蘇山である。後の日本で富士山が風土の代表として扱われているように、倭国の風土の代表とし

て阿蘇山が扱われている。しかも火を噴いている。日本人にはちっとも珍しくはないが、中国人にはたいへん珍しいわけです。それを非常に端的に「火を噴いて天に接す。」という見事な表現をしている。これもやっぱり目の前に見ていると思う。これに対して瀬戸内海、これも珍しいと思う。あんな内海は、入り込んだ海は中国にない。川はあるけど。もし来て見ていたら、一言でうまく表現していたと思う。たとえば瀬戸内海を「池でないけれども湖のごとく」など。さっそうとした文章でそれを表現したと思う。それがない。だからやはり瀬戸内海には行っていない。いわんや大和三山は全く書いていない。

先入観なしに見れば、『日本書紀』や『古事記』の影響を受けずに考えれば、国学の教養を持って見ずに、この文章そのものを見れば、この「日の出ずる処の天子」というのは九州である。こう考えざるを得ない。そのことは『失われた九州王朝』という本でも、その点を一つのポイントにしました。

更に私が今回付け加えれば、従来は「太子を名付け利歌弥多佛利（りかみたぶつり）と為す。」という一節がある。これが一体何を意味するか、従来の学者は苦心して解釈している。「利歌弥多佛利（りかみたぶつり）」と一体何者か。「利歌弥多佛利（りかみたぶつり）」というのは日本語ではない。それで聖徳太子や山背大兄皇子に結びつけようと大変苦労している。

私はこれを「太子を名付け利と為す。歌彌多弗の利なり。」と読み、太子を名付けて（中国風の一字名称で）「利」と言います。（福岡県）上塔（かみたふ）の里にいる。と解釈します。

これは実は「利（り）」というのは、先ほど出てきました神在（かむあり）の「り」で、吉野ヶ理の「り」で、太宰府の近くに「大利」と書いて「おおり」と読む所がある。上大利（かみおおり）、下大利（しもおおり）がある。「おおり」読むならば、これは日本語である。「おお」も日本語だし、里・利（り）というのは、日本側の町・村にあたるような呼び名だ。

これも一言述べておきますが、東の箱根の近くの足柄峠（あしがら）もそうである。万葉集に出てくるときは、半分は「あしがら」、もう半分は「あしがり」と出てくる。あそこでも「り」という語尾になっている。もう一つ同じような例で、信州の有名な縄文遺跡である尖石（とがりいし）。あそこに尖った大きな石もありますから、私は今まで、尖石（とがりいし）とずっと思っていた。ですが、ある人のご教示を受けて分かったことですが、「戸（と）」というのは、戸口の戸のことであり玄関の入り口の戸（と）であり、「がり」というのは吉野ヶ里の「がり」と同じではないかと言われた。そう言われれば、そうかも知れない。

そう言われて、ぞっとした。あそこには弥生の古墳は全然無い場所である。縄文の遺跡しかない。「とがり」も地名である可能性が強い。石が尖っているから「尖（とがり）」という、いままで分かり易い解釈に騙されてきた。ですから里・利（り）というのは、日本側の町・村にあたるような呼び名で結構あります。

とにかく、これは「利歌弥多佛利（りかみたぶつり）」という変な日本語ではなく、「太子を名付けて中国風の一字名称で「利」と為す。上塔（かみとう　かみたふ）の利（里・り）なり。」と読むべきである。中国風の読み方として彼は「利（り）」と自称していた。博多の近くに上塔（かみとう）の地名もある。先ほどの『明治前期全国小字調査票』で調べたのですが、現代かな使いではなく、旧かな使いで、このように仮名を振るが、縄文水田のあった板付の近くですが、上塔（かみとう　かみたふ）下塔（しもとう　しもたふ）とある。その上塔に彼はいた。所在を言っているのではないか。（上塔におられる皇太子）そこにいた皇子だからそう読んだのでないか。もちろん断定は出来ませんが。

そういう理解をすれば、普通に理解できるということです。
　それから、又少し申し添えますが、

又東至秦王國　　また東して、秦王国に至る。
其人同於華夏以爲夷州疑不能明也
その人華夏に同じ。夷州となすも、
　　疑うらくは、明らかにする能わざるなり。

　従来は秦王国の説明だと読んできましたが、どうもそれではなくて倭国の「その人」の説明で有るようです。「その人」の用例を見てゆくと、隋書では「～伝の人」の意味で一般に使われているようですので、ここもそのように見るべきである。
　つまりこれは倭国の風俗は中国とよく似ている。「夷州の国」というのは、彼らから見れば東夷の国ということです。夷州の国へ来たと思っていたが、中国の習慣風俗とよく似ている。我々とそっくりである、本当にこの国は東夷の国か。とこう言っているが、われわれと同じ地名が付けられている。制度も良く似ている。
　それに天子を称しているが、天子というのも中国の制度である。天子という制度も百％中国を真似ていることは疑いがない。それだけでなくて天子の右腕に当たる人、一の子分を秦王と称していることまで、一致している。『隋書』に出てきます。秦王国も中国の制度である。　これも従来は秦王国の説明として、特別に秦王国が中国人に似ている国という説明を従来行ってきた人があるようですが。どうもそうではないと考えております。
　だから『隋書』を見たとき、これは「大和朝廷では無いな。」と、率直に最初に思った感想がそれである。これは、第一回に述べました、まだ邪馬一国の場所が、未だどこか分からない段階で、『隋書』についてはこれは九州だと思った。これを大和にするのはどう見ても無理です。そう強く感じていた。そのことは松本清張さんに東京でお話ししたことがあります。

八『唐書』の倭国と日本

　今の問題を一番明らかにしているのが、『旧唐書』でございます。
　ここではハッキリと倭国伝と日本国伝とに分けてある。七世紀の終わりまで倭国である。そして八世紀の初めから日本国となった。これもその時の中国側の実力者、唐の即天武后が日本国と認定したということが出てくる。七〇一ないし七〇二年の段階で出てくる。日本国という形で中国側が承認するという事になる。
　しかも倭国と日本国の関係も書いてある。もともと倭国であった。日本国はその別種である。

『旧唐書』日本国伝
日本國者倭國之別種也以其國在日邊故以日本爲名或曰倭國自惡其名不雅改爲日本
日本国は倭国の別種なり。その国日辺に有るをもって日本国を名とす。或いは曰う。倭国自ら、その名雅ならざるを悪(にく)み、改めて日本と為す。

　ここからが大事で、
或云日本舊小國併倭国之地
或いは云う。日本は元小国。倭国の地を併せたり。

「或いは曰う。・・・或いは云う。」というのは、現在の学説を挙げているのでは無くて、彼らの言い分を次々挙げるときに、「或いは曰う。・・・或いは云う。」と言っているだけである。

要するに倭国と日本国は別の国だと、はっきり疑う余地無くそう言っている。しかも日本国はもともと小さな国だった。（近畿）天皇家が日本国。ところが倭国のほうが本来の母の国だった。その倭国を併合した。当然白村江の戦いの後です。白村江の戦いは六二二・六二三年ですが。それから三十九年経って、その戦いで負けた倭国を併合した。ハッキリ書いてある。その併合したのを則天武后は承認した。承認した側の資料ですから、これを「嘘を書いてるだろう。間違って書いたのだろう。」とよく言うと思いますよ。これは別に岩波文庫に恨みを持っていないし、お陰ばかりを被っているが。そこに『旧唐書』を記載した本がある。それの解説に「『旧唐書』は倭国に日本を合わせる不体裁なことをしている。」と書いてある。中国人を馬鹿にしている。「中国人が本当に馬鹿なことを、つまらんことを書いている。」と言っている。その一言で天皇家一元という立場なのでしょうね。現在でも大変版を重ねていますが、その解説は変わってはいません。

そういう人たちの根拠はなにかと言いますと『新唐書』である。唐が滅んでから直後に『旧唐書』ができ、それから百年ほど経って『新唐書』が出来る。そこでは倭国伝・日本国伝という二本立ての姿がなくなって日本国伝一本しかない。

だからこれを楯にとって、これが正しい。『日本書紀』・『古事記』の言っていることと一致している。だからそれと一致していない『旧唐書』はつまらん事を書いている。こういうふうに批判している。

ところが『新唐書』を良く読むと、とんでもない話です。良く読むと言いましたのは『新唐書』で日本国伝一本になっているのは当然なのです。なぜかと言えば『新唐書』の最後の跋文・あとがきを見ますと、なぜ『新唐書』を作り直したかという説明が書いてある。『旧唐書』というものが存在する。しかし欠点もある。唐の後半部があまり詳しくない。書き方に大義名分においてに欠けるところがある。書き方に問題がある。そういう事を挙げて、それでもう一度改めて書き直したと書いてある。それは『旧唐書』の書いていることが嘘だ。間違いだというわけではない。唐が滅んだ直後唐の史料を全面的に使って書いてある。唐はもちろん文字の有る国です。文字の有る国の記録を使って書いてある。それ自身が嘘であると百年経って言えるはずがない。そうではなくて『旧唐書』は最近百年ぐらいのところを、『旧唐書』が出来た頃のことを書いていない。

それはそうですね。私なども大学に入ったときに村岡典嗣先生の言葉として、「私は（原則的に）明治以後を扱いません。なぜならば明治以後は歴史ではありません。」と言われて、えっと思った。明治生まれの方ですから、明治生まれの先生にとっては新聞で知っているような現代の話である。「自分にとって歴史ではない。だから私は歴史であるところの、明治時代前の江戸時代までを歴史として扱う。」と言われたことを覚えている。

そういう感覚で、『旧唐書』を書いた人にとって唐代後半は現代という感覚である。記事は全く無いことはないが大変簡略である。おそらく実際は大変史料が有りすぎて困ったぐらいである。ところがそれから百年ぐらい経っていますから、『新唐書』を作った人にとっては簡略なところを詳しく欲しい。それともう一つは、書いて有ることですが最近の軍事情勢・国際情勢をキャッチすることが、出来るようなことが一つの目的である。ところが『旧唐書』では現在の軍事情勢を十分にキャッチできない。これも非常に困る。それで改めて作り直したと書いてある。それで昔、この国とこの国に別

れていたが今は統一されて一本になっている。そういう国は周辺諸国に幾つも有ります。そういう場合現在の国名に統一して、その国の歴史として昔何があったかを記録する。そういう風に書き方に変えている。書き方の違いです。別に歴史事実が変わったわけではない。そういう例はいくらも上げることが出来ます。その場合当然日本列島について言えば日本国しかない。倭国という国は消滅して併呑されて無くなった。母の国は。ですから倭国伝は書かない。その代わり日本国伝の中に倭国のことは書いてある。そのレッキたる証拠がある。

『新唐書』百済伝である。日本国伝の前。そこで白村江（白江）の戦いの事が書いてある。そこに「倭」が二回出てくる。

新唐書　百済伝　白江

（龍朔）二年七月、仁願等破之熊津、拔支羅城、夜薄真峴、比明入之、斬首八百級、新羅餉道乃開。仁願請済師、詔右威衛将軍孫仁師為熊津道行軍総管、發薺兵七千往。福信顓國、謀殺豊、豊率親信斬福信、興高麗、倭連和。仁願已得薺兵、士気振、乃興新羅王金法敏率歩騎、而遣劉仁軌率舟師、自熊津江偕進、趨周留城。豊衆屯白江口、四遇皆克、火四百艘、豊走、不知所在。偽王子扶余忠勝、忠志率残衆及倭人請命。諸城皆復。仁願勒軍還、留仁軌代守。

・・・

一回目は倭人が降伏した。二回目は高麗と倭と共に侵す。二回とも倭である。日本は一回も出てこない。なぜか。当然白村江の戦いの時、この時は日本国は無かった。『旧唐書』も、もちろん白村江の戦いは、倭との戦いとして書かれている。『新唐書』も当然変更する事実を認めていない。だから倭なのである。この事実は非常に重要です。二回とも倭である。だから七〇一を境にして、倭国は亡びた。そして小国であった分家であった日本国は、白村江で負けた倭国、母の国を併呑した。『旧唐書』の事実は別にそのまま動かしていない。

岩波文庫のように『新唐書』は、倭国と日本国を別物のように扱っている『旧唐書』のように不体裁なことは無くなっている。という言い方は、『旧唐書』は間違っている。日本国伝一本の『新唐書』は『日本書紀』『古事記』の示すところと一致する。この理解はじつはアウト。実は事実でないことを示したわけでございます。

この辺もおそらく私が無理なことを言っているとお考えのかたはいないと思う。言っていること自身が道理に反している、無理を言っているとお考えのかたはいないと思う。ただ皆さんが子供の時から教科書で習ってきた歴史書や、大学の先生などが書いている現在の歴史書から見ると違っている。そちらが正しいと見たら、こちらに無理がある。

しかし人間の理性で見たら、わたしの言うことが筋が通っていると思う。筋が通っているということは明治以後の教科書がやっていることが無理である。わたし以外の学者が書いている歴史が無理な歴史である。そういうことを指し示している。

そのことが私が申し上げたキーポイントになるわけでございます。

今日どんな話をしてきたかと言いますと、「O－Nライン」と書いてありますが、Old のO、New のNと言いまして、そこの境が七〇一年である。七〇一年から日本国、そう中国が認定している。それまでの倭国は滅んだ。そして小国であった日本国は倭国を呑み込んで日本国と称するようになって、中国はこれを正しい政権として認定した。則天武后が承認した。これは私の理解では、認定した相手自身が記録している。中国は文字の国ですから、そんなものを中国は近畿天皇家に遠慮したりする必要は全くない。白村江で勝っ

ている。負けた方に遠慮する必要がどこにあるか。彼らが認識したことを書いた。『旧唐書』『新唐書』共に書いた。こう見るのが、その筋道であると思う。

九　郡と評

それでは国内の方にその現れはないかというと、あるわけです。有名なテーマとして、戦後歴史学界の最大の論争と言うべき郡評論争です。井上光貞氏とお師匠さんである坂本太郎さんの論争です。当時若い講師か助教授であった井上光貞氏は、日本最大の歴史学会である東大の史学会で研究発表された。議長は恩師である坂本太郎さん。

「大化改新の信憑性について」という発表である。

『日本書紀』はおかしい。これには問題があるのではないか。特に大化改新のところで盛んに「郡」と書かれている。郡司という形で出てきている。しかし金石文やちょっとした系図などで見ると、どうも7世紀後半に「郡」という制度が存在した形跡はない。逆に「評」という制度が存在したことが伺われる。そうすると『日本書紀』の「大化改新の詔勅」に問題が在るのではないか。そういう発表が有った。

これに対して議長の坂本太郎さんは、「今の発表は、私としては承伏しかねる。しかし私は議長だから主張する立場にないので、改めて論文を持って反論して答えたい。」と言った。その後両者の間で論文における論争が始まった。それで日本中の学者がどちらかに付いてという感じで一大論争になった。それで結論は若いお弟子さんの方の井上光貞氏のほうが、勝ったというか正しかった。

それは最終的に奈良県の藤原宮の木簡（荷札）で決着が付いた。それを見ると七〇一年を境にしまして、それから前は「評」しか出てこない。郡はその後しか出てこない。そのことが非常にハッキリしてきた。そればかりではなく静岡県浜松市浜松駅（旧貨物駅）の伊場の木簡からも同じく七世紀末までは「評」、それ以後が「郡」で出てきた。同じ形で次々出てきた。木簡そのものは、くだらんと言えば言えるが、荷札ですから用済みになったら捨てるものである。それであるだけにイデオロギーに関係しないから、実用にたてば良い。そういう立場から見ますと、木簡というのは非常に正直な史料とみても、そう間違いはない。その正直な史料である木簡が全て七世紀末迄は「評」、以後が「郡」になっていますから、井上光貞氏の言うとおりが正しい。そういう形でドラマチックな結論を見た。私が『「邪馬台国」はなかった』を出す四・五年前です。決着を見たのです。

ところがこのように決着を見たのですが、私のほうから見ると、まだ本当の決着は付いていないと私は考えています。

なぜかと言いますと、坂本太郎さん自身が言ったとおり、「事実問題としては井上君の言ったとおりであると思うが、しかしなぜ『日本書紀』がそれを郡と書き換えなければならなかったのか私には分からない。」と言われた。

そういう問題が残っている。坂本太郎さんは非常に正直な方である。

なぜ正直かということを知っているかというと、わたしはお世話になった坂本太郎氏にもよく本をお送りした。そうすると葉書で返事を下さって、「あなたの本を頂きました。今読み終わってたいへん困っています。」という返事を送ってこられた。普通そういうこ

とを書かない。「本を送って頂いてあり難うございます。参考にさせて頂きます。」というような当たり障りのない返事を書く人が多いではないですか。正直な人でないとそういう書き方をしない。

その正直な坂本太郎さんが、今の論争が決着したと認めた後、しかしわたしには、まだ疑問が残っている。なぜ『日本書紀』が現実に「評」であるものを「郡」と書き直したか、私には理解できない。その通りである。そういう坂本さんのぼやきにもかかわらず、そういうことを現在の学界は無視して、孝徳天皇の時から評制が開始された。これが正しいと、現在の学界では位置付けている。そういう処理をして現在に至っている。

しかし私は思いますが、現実は「評」であるということを我々は荷札で分かったわけですが、当時の『日本書紀』の編集した人は端（はな）から承知していた。『日本書紀』は七二〇年に作られた。二〇才の青年は赤ん坊だから知らないけれども、四〇才の人は二〇年「評」の中で生活している。五〇才の人は三〇年間「評」の中で生活している。そんな年の連中が『日本書紀』を作っているわけでしょう。みんな自分たちが子供の頃は評であったことを、満場一致だれもが知っていることである。何回も出てきますからね。それをみんな「評」を「郡」に書き変えたのか。ついうっかり書き換えたでは済まない。やはり「評」という制度の存在を隠したかった。故意というか、うっかりミスでは有り得ない。何回も出てくる。その故意は、「評」という制度の存在を隠すための、そういう故意である。そう考えなければならない。そういうことは論理の筋道からして当然ではないか。

その「評」という制度はとうぜん一人の人間が気まぐれに言い出したのではなくて、当然権力が施行したと考えなくてはならない。その「評」という制度を隠したという事は、とうぜんその制度を施行した権力を隠すということの目的以外には有り得ない。つまり七〇一年以前には、七〇二年以後の近畿天皇家とは別の権力が存在した。そのことが無いような顔をして、『日本書紀』を作らなければ、ならなかった。「評」という制度が出ていては都合が悪かった。だからずっと「郡」でしたという建て前、（「郡」は孝徳天皇からでしたという建て前）――読んだ方は、みんな嘘だと知っている。言ったら駄目よ。――そういう建て前の本を作った。

「評」という制度を真に施行したのは誰か。この場合には、近畿天皇家以外に施行したのは誰か。そういうふうに論理に絞られてくる。論理的に考えて見て七〇一年以前に、近畿天皇家ではない権力中心が――制度を相当広範囲に施行するというのは、権力がなかったら存在しない。静岡県浜松市まで広がって出てくる。もちろんまた九州にも系図などで出てくる。そういう広範囲に施行されている――、絶対に権力が施行したに決まっている。私がそう言っても想像ではない。想像かもしれんが、万に一つの疑いのない想像です。その権力を近畿天皇家は隠している。『日本書紀』は隠そうとして書かれている。こうならざるを得ない。それは何者かといえば、言うまでもない。先ほどの中国の歴史書にある倭国である。中国側はなにも近畿天皇家に遠慮したり、ゴマをすったり、遠慮する必要は何もない。

その中国側の史料によれば、倭国は七〇一年で滅亡した。志賀島の金印以来の倭国を滅亡して、その分家であった日本国が併呑したと書いている。併呑した側が郡制であって、併呑された側が評制であったと考えざるを得ない。

十　都督と評督

しかも郡の場合には郡司という役職はあるが、評の場合は「評司」という言葉はない。金石文その他で出てくるのは、「評督」という言葉である。だから違いがある。『日本書紀』を「評」という言葉をただ「郡」に書き直せば良いという訳にはいかない。役職名が違う。ところが「督」という言葉は見覚えがある言葉である。何が見覚えがあるかというと「都督」という言葉で出てくる。

先ほど説明しました『宋書』をご覧下さい。

太祖元嘉二年讃又遣司馬曹達奉表獻方物讃死弟珍立遣使貢獻自稱使持節都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭國王・・・

二十八年加使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東將軍如故并除所・・・

順帝昇明二年遣使上表曰・・・

開府儀同三司其餘咸假授以勸忠節詔除武使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭王・・・

『宋書』に倭王は中国側から見ると都督であると何回も出ている。倭王は都督であったことは疑いがない。「都督」がいたところを中国側が歴史書でどう読んでいるかというと「都督府」という。中国側で天子のもとの役所を「府」という。京都府とか、大阪府というのはその流れである。

それでは日本で「都督府」が存在した形跡がある場所があるかといえば、一つだけある。文献的には『日本書紀』天智紀に出てるのですが、「筑紫都督府」という言葉が出てくる。筑紫は当然福岡県です。

日本書紀　巻第廿七

天命開別天皇　　天智天皇

六年春二月壬辰朔戊午。・・・

十一月丁巳朔の乙丑に、百済鎮将劉仁願、熊津都督府熊山県令上柱国司馬法聰等を遣して、大山下境部連石積等を筑紫都督府に送る。

それでは現実の場所に「都督府」という名が残っている所はあるか。これも一つだけ在る。福岡県の太宰府に行かれると遺跡があって、その前に大きな石碑が建っていて、そこに「都督府楼跡」として出てくる。普通現地の人はこれは「都府楼」と言っている。これが「都督府」の略形であることは疑いがない。例として中世文書でも太宰府は太府（だいふ）と略するのと同じ形である。「都督府」のことを「都府」と呼び、建物のことを「都府楼」と言っている。『日本書紀』にある「筑紫都督府」に一致している。

これに対して大和都督府とか近江都督府等は、文献にもないし、現実にそんな呼び方も全く残っていない。ということは日本で都督府があったと見られる所は全国で一カ所で、福岡県太宰府市の筑紫都督府だけである。

これも意地悪ではないが、いろいろお世話になっている岩波古典大系での「筑紫都督府」のところの注釈が凄い。これは『日本書紀』

を作る原本があって、その原本が写し間違えて、それを又そのまま写し間違えたものである。想像に想像を重ねている。『日本書紀』の原本などは誰も見ていない。ところが『日本書紀』のまた元が、写し間違いをして「筑紫都督府」と書いて、それをそのまま写し間違ったのだろう。これは「書いてあるけど信用するな。」と書いてある。あんな注釈、よくも書けたなあ。という気がする。一度帰ってご覧下さい。もちろんこれは苦し紛れとしか言いようがない。

「筑紫都督府」というのは、中国が使いを送ってきた。捕虜を返す場所の記録として「筑紫都督府」という名称があったことは疑いがない。書かれて残っているとおりである。現在も名前が残っている。ということは、あそこに都督が居たということになる。

大和に都督が居るのに、筑紫に都督府があるとしたらおかしい。「都督」というのは中国で使って東アジアでは有名な政治用語です。出来上がった述語です。「都督」という言葉、これが元になって出来たのであろう言葉である「評督」というは、東アジア・中国・朝鮮にはないメイド・イン・ジャパンの言葉である。メイド・イン・倭国の言葉ですが、このメイド・イン・倭国の言葉を造るうえで、元になっているのが「都督」という言葉と考えるのは、それほど無理がない。

つまり私が言いたいことは、「評督」という言葉が各地で出てくるが「評」という言葉は関東から九州まで出てくる。そこの長官が「評督」で、それを統括する長官が居ないということは有り得ない。みんなが自発的に勝手に名前を付けました。それでは、九州から関東まで同じ名前が付かない。そういうことはあり得ない。それを統一した場所がどこかというと「都督府」である。

各地の評の長官が評督、評督が数ある中でそれを統括したのが都督である。その都督が居たところが都督府。こう考えるのが一番筋が通った考え方である。都督となるとメイドイン・ジャパンではない、中国の言葉である。倭王でないと名乗れない。倭王でない人間が私も「都督」と名乗りたいと言っても勝手に名乗れるものではない。となりますと今述べた評制の中心は今の九州・都督府である。このように考える。

そのことは『旧唐書』に書いてある事と一致している。倭国というのは志賀島の金印の以来の国が、全部倭国であり、白村江もその倭国と闘った。それを倒した。それを分家である日本国が併合して統一の王者となったことを、それを倭国を倒した方の唐が承認した。則天武后が承認した。こう言っている。その話ときちんと合う。それを中国側の史料、後代史料とは言えない唐が滅んだ直後に書かれた『旧唐書』でも、そのように言っているし、（唐が滅んで）百年近く経って編纂された『新唐書』も同じ立場に立っている。だいたい中国の中でも唐ほど、日本と関係が深かった国はない。その唐が『新唐書』・『旧唐書』を通じて一致して言っていることを、日本が『日本書紀』『古事記』に合わないから、あれは嘘だよと言ってみても、私は「夜郎自大」というか「手前味噌」としか言いようがないと思う。

率直に言って、私は天皇家のことを良く言うとか悪く言うとか、まったく無関係で、天皇家が素晴らしいということが史料を追跡してわかった場合は遠慮無く言いますし、そんなイデオロギーとはまったく無関係である。

そんなことには関係なく、筋道として日本と最も関係が深かった白村江で闘ったその中国が『旧唐書』『新唐書』を通じて書いていることを、ウソだという言い方が出来る資格のある人はどんな日本人にも、学者にも、いないと思う。天皇家の御用学者だから、それを守らなければ我々は食べていけないと言うのなら、それはもうお

しまいで、仕方がない。しかしそれは本当の学問ではなく、国際的に通用するべき学問でもない。わたしはそう思います。

わたしが今日言いたかったことは「七〇一」という問題でございます。「七〇一」を前提にしない日本の歴史は疑わしい。はっきり言ってインチキである。残念ながら現在の教科書や学者の本は、皆いかがわしい立場に立って書かれていると、言わざるを得ない。そういうことをはっきり言うから、古田を相手にしなければ、いずれ死ぬからという期待に胸を躍らせていると思う。しかしわたしは「それは思い間違いだ。」と思う。わたしの言うことが無理無体なら、死んだらもちろん消え去るであろう。しかしわたしの言うことが筋が通っているなら、わたしが死んだらよけい始末に負えなくなる。生きているときは「あんな奴が言うことは信用できるか。あんな奴が井上光貞先生や津田左右吉先生より偉いと思うか。」と問われるだけだが。（両方とも）死んでしまえば、いずれ劣らぬ死んだ人間ですから、残るのは論理だけの勝負ということにならざるをえない。（それで競争しなければならなくなる。）大体今までの歴史上もそうである。

死んだら何とかなると思って、そういう思惑からイエスは処刑された。本居宣長も江戸幕府は勝手に町医者に言わせ放しにしていた。学問というのは朱子学で、国学を学問とは江戸幕府は一回も認めなかった。ところが亡びたのは国学ではなくて朱子学である。歴史のどれを取ってみても、その道理は一貫している。それは明らかである。体制側にいると、それが分からない。あいつさえ死ねば何とかなる。はかない望みを持つ。――体制を握っていたら宣伝力は抜群であるから――そう考えて最後は宣伝力で勝負するという態度に、ついつい出てしまう。わたしは、そう思っております。しかし、それは終わりに近づいていると理解しています。

十一　模倣と独創

最後にわたしの経験しました興味深いエピソードを紹介してみたい。

西日本テレビの記念企画で、南米のエクアドルに行きましてエクアドルのバルディビア遺跡でメガーズ夫妻と私の御対面の番組が企画された。ところが残念ながらエバンズ博士はその直前と言っていい時期に亡くなっておられ、私は非常にショックを受けた。エバンズ夫人も大変な考古学者で、旦那さんより報告もたくさん書いていられるが、その夫人と御対面した。

帰りにテレビ局の方はハワイで取材を行うことを予定していた。ですが私は先に日本に帰らなければならない用事があったので、皆さんとお別れしてサンフランシスコから成田へ、一人で帰ったときの飛行機の中でのエピソードである。

そのときに、隣に上品な御婦人が座っておられた。わたしは別に気にせずに本を読んでいました。私が本を読み終わったときに、そのとなりの方から「ちょっとお話をしても、よろしいですか。」と声をかけられた。ああ良いですよと御返事した。「実は今困っていることがある。」と言われた。そのご婦人は旦那さんはアメリカ人で、山口県の出身で実家へ帰る途中でした。私には二人の息子があってアメリカの大学に在学している。その二人の息子が最近私に対して訴えることがあって困っている。大学の先生が授業で繰り返して言われることがある。それは「日本人は所詮リファイン (refine) することが出来る民族である。しかし所詮それ止まりである。独創は無理である。独創は我々白人しかできない。諸君安心するように。」と大学で先生に言われたと。・・・

いうなればrefine（リファイン）とは改良でしょうね。何が安心か

というと、その当時アメリカに日本の車がどんどん進出していった時期である。日本のほうが性能が良いとか、保守性がよいとか、いろいろなことで日本の自動車が売れまくっていて、アメリカの自動車産業が衰退の時期だった。その時代の話である。ですからその当時アメリカ人としては自信喪失に成り始めていた時期だった。そういう時代の雰囲気を感じとったアメリカの大学教授は学生たちを慰めるというか励ますというか勇気づけるためにそう言った。

「いや心配要らない。かれら日本人は我々のまねをして、近代的なものを作り、自動車も作った。われわれと同じようなものを作り、やがて我々以上のものを作ったように見えて、脅威を感じている。その先は心配要らない。彼らは所詮まねをするという、模倣するという、それ止まりの才能しかない。彼らは所詮独創の才能がない。その点は、諸君はまったく心配しないでよろしい。」そう言うことを授業で繰り返し言われる。白人の学生は良かった。俺は大丈夫だと思って授業を聞いていたのでしょう。しかし（彼女の）息子さん二人は複雑なわけです。半分アメリカ人で、半分日本人である。半分日本人の方は独創の才能がないと言われて、「お母さん、本当にそうか。日本人はそういう民族か。」と聞かれて困るんだ。一体どういうものでしょうか、と聞かれた。私が多分歴史の本を一生懸命読んでいたのでそのことを聞かれたのでしょう。

わたしは「まったく心配要りません。」とご返事した。

なぜならば、お聞きになったことがあると思いますが、ヨーロッパの三大発明がある。羅針盤、火薬、印刷術。これをヨーロッパの三大発明として、わたしなども社会科（西洋史）の教師をしていたとき教えた。

しかし良く見てみると変な話です。なぜ変な話かというと、

まず火薬。火薬というのは中国で発明されて中東・回教圏に伝わった。十字軍というのがありましたが、回教側が十字軍に使った。ヨーロッパ側の十字軍は騎士ですから馬に乗って行く。それで回教圏に攻め込んだが、騎士ですから、馬が驚いて前足を上げて全然戦闘にならない。それで十字軍が、回教軍と何回闘っても勝てなかった。それが初めてジュノアという人が黒色火薬を作った。これもおそらく質の悪い火薬で、とりあえずメイド・イン・ヨーロッパの火薬を作った。それをヨーロッパでは発明と言っている。

同じく羅針盤。これも中国で指南車。言うなれば南を指さす車があって、黄帝がこれを使ったと伝えられている。。霧の中でも車に羅針盤を付けていて闘ったので、方向を間違えず困らなかった。黄帝が使ったどうかは分からないが、古くから中国で羅針盤が作られたことが知られている。同じく回教圏に伝わって、地中海で回教側が使っていて無敵海軍と呼ばれた。ヨーロッパ側には羅針盤は無かった。だから勝てない。それが同じ羅針盤を付けることに成功し、回教側の無敵海軍を打ち破った。それが地中海の制海権を奪いとった根拠の一つに成っている。これは同じものを作ったということです。

それから印刷術になりますと木版。これも中国が古い。ですが実物の一番古いものは、日本の法隆寺に残っている「陀羅尼」が一番古い。ですがノウハウは中国である。これも中国から回教圏に伝わって、さらにヨーロッパに伝わった。これをグーテンベルグが銅版印刷に変えた。この場合は木版より銅版の方が優れている。銅版なら失敗しても何回も鋳潰して何回でも作りなおせる。これは木版よりより良いものを作った。

まとめると、火薬は黒色火薬の段階に留まっていた。これは元より悪いが、なんとか作った。羅針盤、これは同じものを作った。印

刷、つまりこれはリファインの段階、より良いものを作った。これをヨーロッパの三大発明と言っている。

これもあつかましい話ですね。実物を見て、真似をして同じ物を作っている。真似して作った事を「発明」という。しかし私は（当時の）この用法が間違っていない証拠は、コロンブスのアメリカ大陸の「発見」を見ればよい。初めから人間はちゃんと居た。ヨーロッパ人が初めて見たのを「発見」と言っている。これも同じ時代の同じ用法である。「発明」も「発見」と同じである。

これも余計な話をしますが、ソビエト連邦（当時）に行った人が、驚いて当惑して文芸春秋に書いていました。ソ連の博物館を見に行けば、汽車も列車も飛行機鉄砲も全部ロシア人が発明した（ことになっている）。何年にだれだれが発明したと書かれてあった。当惑して書かれていました。私は（別の見方をすれば）もっともな話だと思う。さきほどと同じでしょう。ヨーロッパ人と同じ用法である。ヨーロッパ人が初めて作ったのを三大発明と言っている。同じ用法でロシア人が初めて作ったのを発明と言ったのも筋が通っています。同じ用法です。それだったら日本人も全部発明できる。

今の歴史上の問題としては、ヨーロッパの三大発明。その最後のリファインの段階の次に、独創的なヨーロッパの文明が開始したという事ですよ。近代文明に入っていったわけですよ。そういう歴史から見るとリファインの次に独創しかない。リファインの前に、もう一回猿まねに帰りますと言っても無理である。つまり安かろう、悪かろうという日本が真似をしている段階がありましたよ。大体似たものを作れましたという段階もありましたよ。それからリファインの段階まで来たのではないか。後は独創しかない。これは歴史の示すところである。

わたしは、どの民族についても例外がないと思っている。ある民族は 地球に出てきて以来独創ばかりです。ある民族は模倣ばかりである。私はそんなものは信じることは出来ない。どんなに偉大な発明であっても、それであればあるだけ、それ以前の先進文明のどん欲な模倣を集合し、出来上がった独創である。中国がよい例である。金や銅の文明がトルコに始まり、黒海周辺・カピス海に広がった。それがＢＣ三千年頃、銅器の文明が、それが今度はバルト海周辺に伝わってきた。わたしは冬の橇（そり）に乗ってだと思う。あれだけ広い領域が同一の文明圏である。それが南下して北から中国・甘粛省に入ってきた。もちろんシルクロードから入ってきたのもある。あるいは南は稲作は揚子江領域から、北上して北側の黄河領域へ入ってきた。東はそれより前にずっと古くから日本の縄文土器が入ってきた。考古学者はそうは言わないけれども、放射能年代を見れば日本の方がずっと古い。わたしには分かり切ったことだと考えていますが、中国側が古くなっても、日本の方がもっと古くなって、中国は追いつかない。わたしの理解では日本は火山列島だから（日本の方が古い）。その火山列島がお師匠さんで、溶岩が土を焼いて、大自然が土より堅いものを作ってきた。それを見た新石器人がお弟子さんで、人間の力で真似をして火で焼いて同じものを作った。人間における工業製品の始まり。大自然に対しては模倣だけれども、人類にとっては独創である。それが一万六千年前から信州から土器の欠片（かたわれ）が出てきているように始まったわけです。一万四千年前から各地に広まった。一万二千年前には、日本は九州から本州まで土器だらけ。同じ時期に沿海州からも出てきています。ですから、その土器が中国や朝鮮に伝播したしたと考えても何のふしぎもない。これも戦後の先入観で、戦前は皇国史観というへんてこな論理でなんでも日本で無ければ済まないというばかばかしい風潮があり、

政策があった。それは敗戦と同時に消え去った。ところが逆に戦後はなんでも中国が中心で、中国から来たと言うと、それであれば結構ですという風潮である。逆を言うと「皇国史観だ。」と言われる。羹(あつもの)に懲(こ)りてなますを吹く。そういう風潮が四十年戦後を覆っている。韓国との関係もそうである。韓国から日本に来るものはあるけど、日本から韓国に来るはずはない。そういう変な思いこみがある。実際は日本の縄文中期後半から勾玉は、青森あたりから牙玉の一種としてたくさん出てきている。韓国で出てくるのは弥生ないし古墳時代でずっと遅れる。しかも現在の北朝鮮部分からは出てこないで、南の韓国部分からしか出ない。明らかに日本列島からの伝播である。先入観なしに見ていくとあたりまえの話である。ところが韓国の人はそうは言わないし、日本の学者もそういうことを言うと相手を刺激するから、それは言わないことにしている。変なナアナアの状態である。暗黙の談合状態です。

そんなことは全くナンセンス。現在の国境や民族意識には全く無関係ない。事実が示していることから判断するならば、中国に土器は伝播している。

(中国は)そういう先輩を真似して、つまり安かろう、悪かろうという段階から、大体似たものを作れましたよという段階もへて、それからリファインの段階まで来た上での中国文明という独創であり、爆発である。そういう手順を経て中国文明は爆発したとわたしは思っている。それは中国文明にとって恥ずかしいことではない。中国人は人間の一人であることを証明しているに過ぎない。そういう目で歴史を見てゆくことが必要であると考えています。

最近いろいろ言っていますが、もう少し我慢して聞いて下さい。大きな歴史の大局から見れば、今の解決はもう日本の独創だけである。つまり日本がヨーロッパやアメリカ以上の模倣やリファインの段階を過ぎれば、後は独創のビッグバンしかない。日本が独創を始めたらもう何を言っても駄目なのである。たとえば石油や天然ガスで動かす自動車でなく太陽熱から取ったエネルギーで自動車を動かすことが出来るとか。今の勢力関係が一変するような独創的な発明をするような段階に来ている。日本はもうそのような独創的な発明をする段階に来ている。そういう段階になったら、創造をやりだしたら、もうすべては消え去る。

最近の経済情勢は、経済の混乱は、私のような経済音痴から見ると、見えすぎるぐらいハッキリしている。この不況は、アメリカ発やソ連発や日本発だといろいろ言っているが、私の目から見れば最近の不況は米ソ発に決まっている。競争で原水爆の、ものすごい実験を何十回となく行っていたじゃないですか。あの原水爆を一発落とすために動員された人の数はおびただしい。又動員された企業の数もおびただしい。経済力もおびただしい。その動員された力をバックに爆弾を一発落とす。だから何千発も作るには、ものすごい生産力を背景にしていると想像する。おそらく間違いのない想像だと思いますが。それを止めたのでしょう。それに参加していたのが全部駄目になった。日本の企業のように無意識に参加していたのもあるでしょうが、日本の電子製品などもたくさん使われていたと思うのですが、それが全部駄目になった。失業になるのが、不景気になるのが当たり前です。不景気にならないほうがおかしい。あれだけの浪費を止めておいて、なお景気が続くというのは奇跡、不合理な話である。イエスが海の上を歩いたというばかばかしい奇跡より、景気が良くなるという話の方が尚おかしいと私は思う。

変なことを言いましたが、私はイエスを大変尊敬している。なぜ尊敬しているかというと、「汝の敵を愛せ。」と言った。迫害者を愛

するという、あれだけの奇跡はない。そういう意味で尊敬している。それを海の上を歩いたとか、ライ病人を治しただの、あの時代はあんな幼稚な事を言わなければ誉めてくれなかったわけで、あんな幼稚な話を取って付けなければ、イエスを尊敬できない程度のレベルだった。イエスが迫害者を愛すると言った。あの一言、あの姿勢ほど、これ以上の奇跡はないと私は思う。これはつけ加えですけれども。

元に戻り、あれだけの原水爆を止めて、景気を良くしようと思うのが無理である。それを考えるなら、原水爆を上回る生産力に匹敵することをしなければならない。アフリカを緑化するなど何をしても良いが、何をしても原水爆を落とすほど馬鹿馬鹿しくはない。わたしは何をしても人類はそういう経済的・人口的実力を既に持ってきていると思う。それを政治家は考えてくれなければ。それをしないで、枝葉末節的には小手先の事はとりあえずはやらなくてはならないが、おおきくは原水爆を上回る生産力に匹敵する事を行わなければ大きくは無理だろう。そういう経済を知らない人間の見方である。

これももう一言突っ込んで言うと、経済を知らない人間の見方ですが、現在は金本位制ではない。現在はドル本位制である。ドルはアメリカだけがドルを刷る権利を持っている。資本主義で自由競争は大事だ。規制撤廃だとアメリカは言っているが、大変あれはいかがわしいと思っている。規制撤廃なら、ドルを製造する権利も撤廃したらどうか。それは絶対手放さない。原水爆を作る権利も放さない。飛行機の作る権利さえも手放さない。規制撤廃しませんよね。日本には作らせない。自分の方だけ必要な都合の良いところを押さえておいて、自分の都合の良いところだけ規制撤廃と言っているとわたしのような素人には見える。経済に強い方はどう見るか知りませんが。

（今の経済の混乱は）米ソ発と言いましたけれど、これが基本ですね。より近くはアメリカ発であるに間違いないと思っています。ドル中心、ドル本位制だから。アメリカ発だから、それを日本発だとかロシア発だとか、いろいろ言い換えるのに苦心しているようにわたしには見える。私などは新聞を見ているだけであるから、その程度の理解しかない。

さらにもう一言つまらん憶測を言わして貰うと、バブルの頃、日本人がアメリカのビルを買ったり、映画会社を買ったりしましたね。あれはものすごくアメリカ人には頭にきた。誇りを傷つけられた。彼らから見れば、日本人というのは猿まね、自動車にしろ、その猿まねをさせてやっている連中だ。その猿まねの連中に我々の誇りとするものを買い占められるとはなんたることだ。そんなことは書けないけど、内心はほとんどの人はそう思っていたと想像する。これは想像に過ぎませんけれども。

だから良し。これをやってやれ。ドル本位制ですから。それで手を打ち始めたと思う。彼らの手練手管は私は全然知りませんけれども、だから今のような状態になった。一時大変な円高で、日本は製造工場を東南アジアに出した。東南アジアに進出した。それで待ってましたばかり円安にして東南アジアが立ちゆかないようにした。それでは東南アジアに進出した日本も立ちゆかなくなるのが、あたり前である。わたしなどは経済を知らないから、知らない強みで、いわゆる筋書き通りに進行して、なんの不思議もないような感じを持っている。

そういう意味ではアメリカの政策は成功しつつあるように見える。しかしその場合の彼らの一大ミステリーは、あらゆる戦術・戦

略の基本を為しているものは、日本人はリファインしかできない民族である。独創は無理である。そういう信仰のような(考えである)。大体何百年か成功すると、人類の歴史から見ると瞬間でしかないが、成功すると、だいたい人間というのはうぬぼれる。日本人も結構そういう面はありましたよ。アメリカ人もうぬぼれているのではないか。「日本人は独創出来ない。」という前提で、あらゆる戦略は立てられているように私には見える。これを突破するためには、政治家は当面の問題としていろいろやって貰わなければならないし、当面の問題としてはやって貰ったらよい。しかしそれは「枝葉末節である。」と言っては悪いがそれだけのことです。

根本の解決はさっき言った独創ですよ。リファインの次の独創を次々生み出すことこそ本当の解決。彼らの戦略・戦術の上をいくものです。彼らの基本の思いこみを打ち破るものです。そうすれば絶対に次の時代がやってくると私は思っている。先ほど言った自動車を太陽熱で動かすこと等は、私の出来ない話ですが、私の関係する分野でも取り上げる問題はたくさんある。

わたしが良く上げる問題ですが、バイブルの先頭に創世記がある。その創世記に宇宙を作った神々の話が出てきます。つまり「神々」という複数ですよ。つまりヘブライ語では「神々」と複数になっている。ところがなんと英語ですが、欽定訳の聖書(バイブル)では、「神」という単数に変えられている。改竄(かいざん)されている。ルーターのドイツ語も単数、フランス語も単数です。そして日本語は単数・複数はないようなものですから、「神」とは書いていない。言うときは「エホバの神が・・・」という解釈を牧師さんはしているのだと思う。しかしヘブライ語の原文は疑うべきもない複数形である。

これはわたしから見ると大変当たり前である。当然今のバイブルは、BC三千年位から始まったと考えられていますが、人類にとってBC三千年というのは最近である。それ以前に楔形文字の文明があったことは誰でも知っている。多神教の時代ですね。(聖書の)創世記といっても(人類何十万年から見れば)たかだかBC三千年、それ以後、初めて神様が宇宙を作ったというアイデアを思いついたというばかばかしい話ではない。当然その楔形文字の文明の時代にも、神々がいて「この宇宙はどうしてできたか。」というテーマはあった。当然その場合「宇宙は神々が作った。」に決まっている。だからバイブルを作ったときも、「宇宙は神々が作った。」に決まっていたから、そこだけは変えられなかった。単数に出来なかった。中近東の人たちは。

だから、わたしから見ると複数になっていることに非常に意味があり、素人としては(聖書は)史料として貴重である。わたしなどには、分かり切っていることです。しかしヨーロッパ・アメリカではそうは言えません。そう言ったら今晩は夜道が危ない。帰るとき危ない。いろいろ居ますから、無事には済みません。クリスチャンの学者も、もちろん分かっているけれども、書いていません。書くときには「昔は尊敬すべき時には複数形で示すことがあった。」と注釈では書いてある。それだったら聖書(バイブル)、全部複数形で書いたら良い。又それだったら「神様を尊敬しなくなったから、単数になったのか。」と、こちらは言いたくなる。そういうことを言うこと自身が、不遜であるということになるでしょう。バイブルを尊重するキリスト教の専制世界では、それは出来ないことである。幸いに我々の社会は、キリスト教の専制支配の社会ではないですから、そういうことが率直に言える。

そういう率直に言った立場からのバイブル研究とキリスト教のイデオロギーの立場に立つバイブル研究とが、衝突すればどちらが勝つか。勝つか負けるかという言い方は変ですが、衝突というか喧嘩

をすれば、別にする気はこちらにはないが、絶対にわたし一人の方が勝つ。いくら世界中のバイブル研究者が総掛かりで来ても、わたし一人の方が勝つ。イデオロギーとそうでない立場ですから。

有名な洪水神話の問題でも、有名なエホバの神に関わってバイブルを覚えてきておった。ところが一人のある青年の発見によって（真実が判明した）。大英博物館のアルバイトで、その人が泥だらけの資料を見て、楔形文字を読んでいくと「洪水神話」ではないかと言った。読んでいくと確かに洪水神話である。つまりバイブル以前の洪水神話である。何種類か、見つかった。

あれは立派である。その青年に奨学資金のようなものを与えて、中近東に派遣する。日本ではなかなか若い青年にそんなことをしない。中近東に行って、史料を持ってきたという同じ所を探したのでしょうが、続きがいろいろ見つかった。いろいろなタイプの洪水神話が有ることが分かってきた。そこで一生懸命バイブルと同じものを探したがなかった。無かっただけではなくてバイブルの洪水神話は、他の楔形の洪水神話よりずっとスマートで、完成度が高いことが分かった。それを自慢して書いているものが良くある。わたしから見ると、自慢するのは勝手ですが、しかし逆に言えば素朴な方がおかあさん、そこから生まれた子供の方がバイブル、そういう関係を示している。子供の方が唯一神を元に、より完成された形に、改竄（かいざん）というか、書き直されている形を示している。しかし、そういう言い方を彼らはしないで、いろいろ有ったけどバイブルが一番立派であるという結論に持っていくが。

とにかく、そういう目から見ると先ほどの聖書の先頭が「神」でなく「神々」であることは当たり前である。

時間が無くなって終わりになりましたが、日本でアミニズムという言葉がある。あれも変な言葉ですね。キリスト教の信仰が立派で一番高等で正しいという立場で、それ以前の多神教を卑（いや）しめてるからアミニズムという言葉の書き方になる。それを日本の学者が（背景のキリスト教社会の理論抜きで、）頂いてきて有り難（がた）がり、深遠な学問用語を使った気になって書いておられる。わたしから見るとキリスト教猿まねである。（アミニズムという）多神教の世界の中から、キリスト教という唯一神教が生み出されていく。母は多神教で、子供は唯一神教。それはバイブルであったり、コーランであったりする。いずれも人類の貴重な記録だと思う。そういう母のところを変なアミニズムと言って卑しめること、変な言葉を付けること自身がキリスト教宗教学の性格をよく示している。

考古学もそうである。

ストーンサークルという言葉もそうですよ。あれは見事な言葉です。（ヨーロッパ）考古学の性格を見事に示している。なぜかというと、イギリスを初めとするヨーロッパの遺跡を見学に行きましたが、サークルに囲まれた中央部（石の神々）、基本的には多神教の神々、あれが全部壊されて、除かれている。歴史的にはキリスト教の牧師さん達が壊した記録がきちんと残っている。中心部が壊されている。残っているのは、全部壊せば何も残らないが、少しづつ一部分石が残っている。多神教の神様の中心が全部壊されている。ストーンサークルというのは、キリスト教が壊した後を「ストーンサークル」と呼んでいる。この「ストーンサークル」という言葉ほど、歴史的な用語はない。我々はそういう言葉だというキリスト教考古学の意識無しにヨーロッパで使っているから「ストーンサークル」という言葉を、れっきたる学問用語だという感じで見ている人もたくさん居るのではないか。

われわれは、そういう考えではなく、キリスト教は素晴らしい文明ですが、たいへん評価しますが。しかし万能ではないし、歴史上において一定の長所と一定の欠陥を持った、一定の時期に栄えて一定の時期に滅んでいく、多くの宗教の一つであることは、残念ながら疑うことが出来ない。そういうキリスト教社会が作り出した近代文明は非常に素晴らしいけれども、また非常に大きな欠陥を持っている。

我々は独創する場合、それに恵まれているわけで、我々はそれに関わりのない真実というか、宗教やイデオロギーに服しない立場で見ていくという立場で、やり方をすれば精神科学の分野でも新しい発見が続出して困ると思う。だいたい今までの発見はアメリカやヨーロッパですから。あれをもう一度壊して、もう一度厳密な論理により組み立てていくという作業をみんなが待っている。やらない事だらけ、つまり独創待ちだらけである。この精神科学は、わたしは承知しているが、おそらく自然科学でも同じようなことがあると思っておりますので、ぜひ今後に期待したい。

それで期待する場合でも、やはり道理を道理として観るという立場が大事なのです。日本の歴史について第一回と第二回に言ってきたように、道理を道理としてみる、論理を論理として押し進めずに、「従来そうなっているから、それは動かせないよ。これを覚えておけ。」というやり方を、教育や学問でやっておれば、とても今のような独創の爆発は無理だ。その無理があちこち今限界に来ている。経済などはその無理の露出である。ということで見た目には非常に行き詰まりには見えるが、わたしなどには輝く独創大爆発の前夜であると思っております。

どうも今日は遅れて申しわけありませんでした。

（終）

1　この中で特定の文字については、文字鏡明朝体 true type を使用させて頂いています。

使用文字　　俉　餉

（文字鏡研究会ライセンス番号 VPKFW-P1049 ）

古代史再発見『王朝多元ー歴史像』

２００４年　９月　１日　第１刷発行

著　者　古田武彦

編　集　古田史学の会

発行人　横田幸男

東大阪市寺前町２－３－１６

TEL & FAX 06-6727-0408

郵便番号　577-0845

※本書の本文書体は、ヒラギノ明朝体を使用しております。ヒラギノ明朝体で表示出来なかった文字については、文字鏡明朝体 true type を使用しております。